
GOD EATER BURST 【紅き目を持つ漆黒の捕喰者】

蒼空(仮)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O D E A T E R B U R S T 【紅き目を持つ漆黒の捕喰者】

【Nコード】

N 0 0 5 1 T

【作者名】

蒼空（仮）

【あらすじ】

人類の天敵……アラガミに恋人を捕喰され特異な能力に目覚め始める1人の少年の物語

ブログ（前書き）

なんか無性に執筆したくなったので投稿しました（笑）

他の作品と同時進行になるので更新は遅くなりますが読んでくれます嬉しいです。

プロローグ

「はあ、はあ、はあ！」

少年が女の子を抱えて走っている。友達だろうか

「しょ……う……私の事はいいから……早く逃げて……」

翔と呼ばれた少年は答えた。

「バカいつてんじゃねえ！絶対に……絶対に助けるからな！」

「でも……私はアラガミに腕を食べられたんだよ……私をおいて翔だけでも……」

「サラをおいて逃げるなんてできるか！……くそっ！」

「フフッ……翔のそういうところ……私、大好きだよ……」

「俺だってサラの事が好きだよ！だからこんなところで死ぬなんて許さねえからなー！」

「ありがとう……でもごめん……約束は守れそうにないや……」

「お前何いつ……」

サラが指差した先には鬼の様な尻尾をもち体調が4〜5mはあるアラガミ『オウガテイル』がいた。

「グルル……」

「ちい……どうしたら!」

「翔……これ、」

「これは……」

サラが渡したのはまだアラガミが現れる前に撮った翔とサラが2ショットの写真を入れたペンダントだった。

「私は……多分、ここで死ぬ……でも、翔は絶対に生き延びてね……これは……私の……」

「サラ……?」

バツ!

サラは翔から離れ自らオウガテイルに向かっていく。

「グルル……」

「翔……絶対に……生き延びてね……」

「サラ……まさか!」

「グアア!」

ガブウ!

「くっ……翔！早く！！私が囿になってるうちに……」

グチャ……

「あ……ああ……」

そう言い残すとサラはアラガミに頭を噛みつかれ息絶えた……

「よくも……よくもサラを！」

「グルル……ガアア！」

翔は近くにあった鉄パイプを持ち力の限りオウガテイルに殴り付けた。

「ガウウ……」

「許さねえ……絶対に許さねえ！！！」

そういう翔の目は紅く染まり狂気の瞳になっていた。

「うおおおおー！！！」

バキィ！

「ガアア……」

バタン

オウガテイルは一撃で倒れた。普通は神機という特別な武器でしか倒せないはずだが翔はそれを鉄パイプだけで倒し退けた。

「はあ……はあ……」

「君！大丈夫か！？」

翔に手を差しのべたのは神機を持ち人類最後の砦、フェンリルの極東支部に所属している神機使い達だ。

「あんたたち……は……」

ボタン

「君！君！目を覚ませ！」

翔は意識を失っていた。そして神機使い達によってフェンリル極東支部に運ばれていった。

「うん……？」

「目が覚めたか？」

「……？それにあんたは……ぐっ！」

「無茶すんなよ。俺は雨宮リンドウ、ここフェンリル極東支部第一部隊のリーダーだ。あんたは？」

「俺は……夜神翔。」

「夜神翔……か、いい名前だな。」

「お世辞はやめてください。それより何で俺はここに？」

「ははっ、まあ落ち着け。こっちにも聞きたい事がわんさかある。」

そういうとリンドウさんは煙草を吸い始めた。このご時世に呑気な……しかも怪我人がいるというのに

「なんですか？」

「まずはなんであんな場所、つまり贖罪の街に居た？」

「確か……外部居住区にアラガミが現れて……サラと一緒に逃げたんです。」

「ふうん……次にサラってのは？あとは両親は？」

「サラは俺が大好きな女性です、まあ彼女とでも言うんですかね。両親はいません。気づいたらサラ達と一緒に居ました。」

「そうか……最後に、1つ。お前を発見した時に近くにオウガティルの死体が居たんだが……あれはお前がやったのか？」

「それは……わかりません。気づいたらそのオウガティルが倒れて

いて……すいません。これ以上は……」

「なるほどな……ありがとう。しばらくここで休んでてくれ、後で来る。」

「はい。」

ウイーン

「サラ………」

俺はサラから受け取ったペンダントを開けた。中にサラと俺が映った写真がある。

「本当に……本当に死んじゃったんだな………」

正直言つて死ぬほど悲しい。でも死ぬわけにはいかない、サラの『翔は絶対に生き延びてね……』という約束を守るためにな。

ウイーン

「君が翔君かな？」

「はい、そうです」

目の前にはリンドウさんと比較的色彩白でキツネ目で癖っ毛の激しい眼鏡をかけたおっさんがいた。

「翔、この人はペイラー・サカキ、そして自らをスターゲイザーと

呼んでいたりする。俺達ゴッドイーターとしての基盤を作った人だ。」

「よろしく、翔君？」

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

つか……なんだこの挨拶は？なんかこれから神機使いとして働いてもらうみたいな感じの挨拶だな

「回りくどいのは嫌いだから単刀直入に言うよ。君はゴッドイーターになれるとしたらなりたいかい？」

「ゴッドイーター？」

つまり、俺に神機使いとしてアラガミと戦い、人々を護れということか？

「無理になりたいとはいわないでいい。率直な意見が聞きたい。」

率直な意見か……んなもん決まってるだろ。

「なりたいです。もしもなれるなら是非ともやりたいです。」

「……………」

なぜか2人とも啞然としている。そりゃそうか

神機使いは確かに生活水準が高いが、その代償としてアラガミと戦い撃退、または討伐せねばならないのだから、

つまり、命の危険にさらされるわけだ

「本当なんだね？その言葉は？」

「当たり前です。こんな嘘についても意味がないですし、」

「そうか……なら良かった！ちよつとこっちにきて！」

「え、ちょ！サカキさん！？」

俺はサカキさんに手を引つ張られ部屋をでた。チラツと神妙な顔の
リンドウさんが見えたのだが気にしないでおう。

――訓練所

「なんだここは……」

今の状況を説明するとだな、サカキさんに制服らしきものを渡され
それに着替えるところに連れてこられたわけだ。

そしていまいる部屋の中央にはなんか怪しげな物が……

「ようこそ。人類最後の砦、フェンリルへ。今から対アラガミ組織
『ゴッドイーター』としての適合検査をする」

「少しリラックスしたまえ、その方がいい結果がやすい。」

こんな状況でリラックスできるかつての

「準備ができたなら、中央のケースの前に立ってくれ」
準備もなくそも、ここに来た時点で覚悟はできている。

……少し怖い気持ちもあるのだが、考えても仕方ないのでケースの
前に行く。

装甲と思われる部分の近くに銃身がついておりその上あたりに刀身
部分がついている。俺はその神機と思われる物の持ち手に手を置い
た。

瞬間――

バン！グチャアアア！！

「うがああああ！！」

ケースがしまり腕が抜けられない状態になった。そして明らかに腕から
体に向かって何かが入ってくるような感覚に襲われた。

それにしても痛い！ひたすら痛い！！そしてそれを上回るくらい気
持ち悪い！！はやく終わってくれ！

プシュー――

「がはあ！……はあ……はあ」

「おめでとう。君がこの支部初の『新型』ゴッドイーターだ。」

「新……型？」

持っている神機を持ち上げると持ち手のやや上あたりから知らないうちについていた腕輪につながり直ぐに戻った。どうやら俺を受け入れてくれたようだ。

「適合検査はこれで終了だ。気分が悪いなどがあればすぐに申し出るように、」

「はあ……」

さて、ゴッドイーターとなったわけだが明日からどうなることやら……まずは訓練をしアラガミ相手に死なない事が先決かな、

第1話 メディカルチェック

「俺、藤木コウタって言うんだ。よろしくな！」

「俺は夜神翔だ。よろしく、」

適合検査が終わりエントランスにいると多分同期になるだろうコウタが来たので挨拶をした。

「ガムいる？」

「あるんだったら貰うわ。」

「あれ、無いや。ごめん今食べてるのが最後だったみたい。」

「ストックぐらい覚えとけよ。」

「えゝめんどくさい・・・」

そんならいでめんどくさいと思うなよ、

それからしばらく待っていると・・・

「立て」

「へ？」

ぱっと見ジーパンみたいだが色が白いうえに横に切れ込みがありそれを紐でくくってるようだ。そして目を引くのがその胸元だ。ただ

でさえでかそうなのにそんな格好してたら余計だろ、

「立てと言っている、立たんか！」

「はい」

「はは、はい！」

流石コウタ、口調がおかしい。

「私は雨宮ツバキ、お前たちの教練担当者だ。この後の予定はサカキ博士の研究室でメディカルチェックを受けた後訓練所にて基礎体力の強化、罨や神機の扱いかたを学んでもらう。つまらないことで死にたくなければ私の質問には全てYESで答えろ、いいな？」

「はい」

「は、はい！」

「よし、まずはお前・・・翔からだ、一五〇。時までにサカキ博士の研究室に行くこと。それまでは先輩神機使いに挨拶でもしておくんだな」

「今日からお世話になるフェンリル極東支部、通称アナグラだ。」

そついうとツバキさんはどこかへ行つた

「ひゃゝ焦った。」

「何に焦るんだよ？」

「だってみるよあの胸！すげえなあれ！」

そんなことかよ・・・

「くだらないこと考えてんなコウタは、」

「あ、リンドウさん。」

「おう、新人2人ともよろしくな！」

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

雨宮リンドウ・・・あのツバキさんの弟で彼と一緒に出撃した人は生還率が九割と凄まじく高いようだ。ロングブレードの達人で単独で山のような巨大なアラガミ『ウロヴオロス』をも倒したらしい。すげえめっちゃ強いじゃん。

あ、今の情報はノルンのデータベースからね、

「そっぴやリンドウさんっていつから極東支部にいるんですか？」

「確か・・・15歳からだっけ？詳しくは覚えてないな」

「15歳って・・・マジスカ。」

「マジなんだよこれかな、あ、翔時間大丈夫か？」

「え？」

見ると時間は一五〇〇時まであと五分ぐらいだった。

「やばっ！すいません、先に失礼します。」

「じゃあな」

「また後でな」

コウタ達とわかれサカキ博士の研究室に行く。

―研究室

「失礼します。」

時間ギリギリに入ってきた俺・・・大丈夫か？

「ふむ・・・予定の時間ジャストに来るとは・・・いやはや予想外だね」

「知ってると思うけど改めて自己紹介するね、私はペイラーサカキ。この支部のアラガミ技術開発の統括責任者だ。以後よろしくね」

「よろしく願います。」

「で、こっちの白い服を着たのが・・・」

「ヨハネス・フォン・シックザールだ。一応この支部の支部長だ。よろしく頼む」

「夜神翔です。こちらこそ、よろしくお願いします」

「さて、まだ用事が終わってないんだよ。先にヨハンの用事を済ませてはどうだい？」

「サカキ博士・・・そろそろ公私のけじめをきっちりつけていたきたい。」

シックザール支部長は溜め息混じりにいった。

「さて・・・適合検査ではごくろうだったね、翔君。君には期待しているよ。」

「はあ・・・」

「そして、我々フェンリルの目的を改めて説明しよう。」

フェンリルは突如現れた人類の天敵、アラガミに対抗すべく作られた組織で元々は薬品関係の会社だったようだ。そして俺が配属されるのはリンドウさんがいる第一部隊のようだ。第一部隊は外部居住区に入る前にアラガミを討伐、撃退せねばならないらしいがそれに見あった報酬やアラガミ素材が手に入るらしい

ということとは命の危険もあるってことか、まあ神機使いになったらそれは覚悟しなきゃいけない訳だが、

そして回収した素材は研究等の他にエイジス計画と呼ばれる大きな

計画に使うらしい。エイジス計画は旧日本海だっけ？そこにあるエイジス島に生存が確認されている全人類を保管できるようでそこにいればアラガミに襲われることは無いらしい。

「す、凄い！この数値は！」

博士うぜえ、何が凄いんだよ

そんなサカキ博士を無視してシツクザール支部長は長々とエイジス計画やらどーのこーの言ってたがどーでもよかったから聞き流した。

「よし準備OKだ。ヨハン、そっちは終わったかい？」

「とりあえずは終わった。後はメディカルチェックの結果だけだ。」

「やっぱり元技術屋の血が騒ぐんだね。翔君、そこに横になっていてくれ、予定では10800秒だ。それまではおやすみ」

「はい」

横になっていると何か体に注射されてその瞬間に眠気が襲ってきた。抗いたくても俺は寝てしまった

「ん・・・」

起きるとコウタがいて紙と鍵を渡された。

「はいこれ、あんたの部屋番号と鍵。」

「ああ、ありがと。コウタは？」

「俺はあんたの隣の101だ」

「じゃあ俺は100か？」

「うん」

なんというキリのいい番号

俺の部屋は新人区画の100番の部屋だ。分かりやすくいい

「おお・・・やっぱり豪華だな」

部屋に入るとベッドにソファ、個人用ターミナルと思われるものがある。さらには冷蔵庫まであるじゃねえか

「少しターミナルをいじってから行くか。」

そうしていじってみたところ俺の神機が新型と呼ばれる理由は近接と遠距離の切り替えが出来るということだ。今までは近接か遠距離のどっちかしか使えなかったが新型神機は遠近両用のようだ。まあ遠距離からの攻撃は限りがあるし（近接攻撃を重ねればまたつかえる）近距離と遠距離の戦闘をしなければいけないみたいだ、めんどくせえ・・・

「でも訓練は真面目にしようか、死ぬわけにはいかないしな」

「おい、翔！訓練いこうぜー」

「コウタか？わかった、すぐいく」

・そしてコウタと共に訓練所に向かう。どんな訓練になることやら・

第2話 訓練の始まり（前書き）

今回ツバキが若干鬼畜ですw

第2話 訓練の始まり

「来たか、それではまずここを10周走れ。マラソンじゃなくて本気でな」

「ええー!？」

「文句を言えばアラガミに呆気なく喰われてしまう方がいいのか？」

今はコウタと共にツバキさんの訓練を受けている。まずは適合検査をした訓練所を10周走れと、

「行くぞ、コウタ。アラガミに喰われたく無かったら真面目に訓練しようぜ」

「翔まで……まあいいや、いくぜ!」

ダダダダダ……

「ふむ、よろしい。3分後にもう一度10周だ。」

「はあ……はあ……」

「ツバキさん……ちとキツイっす。」

「これくらいで音をあげるな、まだまだあるからな。」

「マジかよ……」

神機使いをなめてた……

「ほら、3分たったぞ。走ってこい！」

「ヒッ！」

「よし、今日はここまでだ。明日もあるからしっかり休んどくように、」

「は、はあい……」

あれから腹筋、腕立て、背筋、スクワットetc……等をやり今日の訓練は終わった。

「きつついな……訓練……」

「だな、でも実施訓練のほうがもっとキツイだろ。」

「確かに……ああ、俺やってく自信ないよ」

「頑張れよ、そっぴやコウタって新型神機か？」

「違うよ、旧型神機の銃のみ。そっちは？」

「俺は新型神機らしいな。」

「いいな。なんかカッコいい、」

「なわけねえだろ。近接と遠距離2つの訓練をやらなきゃいけないから他より倍はしないといけないからな。」

「そう考えると俺は遠距離だけだからまだ楽なほうか。」

「だな、じゃ戻って飯食おうぜ。」

「おっけー」

―食堂

「うま〜！やっぱ腹減ってる時の飯は最高だな！」

「空腹は最高の調味料ってのは本当かもな」

ただいま昼食中。やはり飯が比較的豪華だ。

「飯中に失礼。俺はブレンダンバーデルだ、よろしく。」

「んで、俺が大森タツミだ。ミッションで一緒になった時はよろしく！」

「あ、はい。よろしくお願いします。」

バーデルさんとタツミさんか。覚えとかなきゃな

「どやった？ツバキさんの訓練？」

「そりゃもう疲れたっすよ。ありゃ鬼だね」

「あはは！まっそうだよな。」

「ほう……？」

「「ひっ！っ……ツバキさん？」」

「いい度胸だな2人とも……罰としてスクワット200回だ！」

「「ギャー！」」

そういわれタツミさんとコウタはツバキさんに引っ張られていった。

「あいつらも、バカだよな。」

「確かに、コウタは元々ですけど」

「あっはは、それもそうだな。タツミはヒバリにぞっこんだし、」

「ヒバリってカウンターにいるヒバリちゃんのことですか？」

「ああ。毎日毎日話しかけたり食事に誘ったりしてるな、まあ成功したためしはないが」

「へっ」

真面目そうなんだけどなタツミさん。

「そついや翔って使用武器決めてるのか？」

「いや……まだですけど、」

「そうか、まっアラガミに喰われなければなんでもいいけどな。」

「それもそうですね、バーデルさんは何なんですか？」

「俺？俺はバスターブレードだ。俺の他に使ってるのはソーマぐらいか」

「ソーマさんってあのフード被ってる人ですか？」

「ああ。多分リンドウさん並みの実力はあるんだろうが……」

「度重なる違反のせいで階級は高くない……ですよね？」

「ああ……ってカノン、それにジーナまで、」

「はじめまして、翔君。私はジーナ・ディキンソンよ。こっちは台場カノンね」

「はじめまして！台場カノンです、ミッションで一緒になったらよろしくお願いします！」

「夜神翔です、よろしくお願いします。」

台場カノンさん……っていうよりカノンちゃんはピンク色でみつ編みの髪をカチューシャの様にしている。服装は緑色のワンピースで、

丈夫そうな生地で出来ている。そして中々の美ny（ry

ジーナさんは銀色の髪で左目に眼帯をしておりツバキさんと同じく大きく胸元が開いた服を着ているがツバキさんと違うのがまな板だということだ。何かって？察しろ

「バーデル、カノンと私と一緒にミッションに行かない？相手はザイゴートとコクーンメイデン各2体づつよ」

「わかった、先に行っててくれ。あとでいく」

「またあとでね」

「仲がいいんですね」

「そうか？まあ嫌でも仲良くしなきゃアラガミと戦う時にミスをしてしまうからな、」

「成る程。」

「ああ、じゃあ俺はミッションに行ってくる。じゃあな」

「はい、それでは。」

死なないとは思っけど……まあ大丈夫だろう

「さて、コウタの様子を見に行くか。」

― 訓練所

「足があ……」

「翔……助けて」

「まだまだ終わらんぞ！そら、走れ走れ！」

「「イヤアアア！！」」

うわあ……ツバキさん鬼畜、まあ言わないけど。コウタとタツミさんの足はがつくがくにも関わらず走れと、まさに鬼

「翔、なんかいったか？」

「イエ、マツタク。」

カタコトだけど大丈夫だよな……？

「……部屋にいるか」

― 自室

何しようかな……そうだ。

「ターミナルでも弄ろう。」

なんか前にも同じ台詞を言った気がするが気にしない気にしない。

「……ふーん、ソーマさんは死神……ねえ、」

嘘くせえ。どんな表現してんだよ、

「あとは……武器の勉強でもするかな」

そうこうしてるうちに時間が19時を回ったので瀕死のコウタをつれて飯を喰いシャワーを浴び寝た。

第3話 模擬訓練

一週間がたち訓練やアナグラにもなれてきたところでツバキさんからそろそろ模擬アラガミを相手にした実践形式の訓練をすると言われた。

「やっぱ模擬とはいえ緊張するわー」

「ははは、まあ頑張れよ。俺も最初の頃は……」

シュンさん（金にしっこい子供？）の昔話はスルーして使用武器を決めに神機点検、開発室に向かう。

「リツカ〜？」

「何〜？眠いんだけど……」

楠リツカ……神機についてはトップクラスの知識を持ちサカキ博士と気が合うらしい。呼び捨てでいいと言われたので遠慮なく呼び捨てにしている。

「ちょっと武器のレプリカを見せてもらいたいんだけど……」

「ああ、わかったよ。ちょっと待ってね。」

そっついリツカは出ていった。さっきレプリカと言ったが新人が神機に取り付ける武器や装甲は見るだけではわからないと（ワガママ

な）要望があつたため訓練用のダミー用品を使い簡易的なモデルを作つて触らせてもらつたりしてるわけだ。

「おまたせ、はいこれ。」

「ありがとう。」

「見終わつたらその机に置いていてね、それまで私は寝るわ……」

「りょうかい。」

リッカが持ってきたのは刀身部分と銃身部分だ。ショートブレードとロングブレードとバスターブレードが刀身部分で、スナイパーとアサルトとブラストだ。

ショートブレードはリーチと威力が低いが軽い刀身を生かし手数と速さで圧倒する武器だ。

ロングブレードは全体のバランスに優れていてインパルスエッジという剣形態でなみ使用できる強力な砲撃ができる武器だ。

バスターブレードはリーチと一撃の威力が高いがその大きさから重く機動力に欠ける。しかし攻撃後に素早く装甲を展開できさらには一撃必殺のチャージクラッシュという大技を使える。

スナイパーは貫通能力が高く狙撃向け。レーザー系のバレットの運用に向いている。

アサルトは連写性能に特化していて撃った時の反動も少ないが一撃の威力は低く連続であてることと真価を発揮する。弾丸系が得意
ブラストは近距離で放つバレット……爆発や放射系のバレットの運用に向いている。敵の攻撃を喰らいやすいが攻撃力はピカイチ。

……こんなもんか。刀身はバスターブレードで銃身はスナイパーかアサルトにしてみるか

見終わったので机においておく。

『ピーピー、業務連絡。第1部隊の夜神翔は第3訓練所に来てください。繰り返します……』

……どう考えても実践形式の訓練しかありえん。第3訓練所って他の訓練所より少しかい訓練所だぞ。大丈夫なのか？

まあいいや、行くか。

——第3訓練所

「来たか、これより模擬アラガミを相手にした実践に近い練習をする。使用武器は決まってるか？」

やはりか……やっぱり緊張するな

「刀身はバスターブレードで決まってるんですけど……銃身をアサルトかスナイパーかで迷ってるんです」

「ふむ、まあこの訓練で決めればいいだろう。まずは近接と遠距離の切り替えからだな。切り替えはこれをこつすれば……」

ガチャン！

「おお！」

神機が変形し銃携帯になった。すげえ

ちなみに今つけてるのはナイフ（シヨート）、50型機関砲^{アサルト}、支援シールド（シールド）だ。模擬アラガミが現れる前に付け替えてもらうつもりだ

「よし、出来るな。次はバレットの交換だ。使用したいバレットをここにセットしてここに回して合わせれば……よし、撃ってみる。」

「はい、そら！」

ドンー！

「よし、大丈夫だな。次は装甲の展開だ。」

「確か神機に付いている装甲をアラガミに向けてこのボタンを押せばいいんですね？」

「そうだ、基本はそんな感じだ。武器を付け替えてくるが銃身と装甲はどうする？」

「銃身はとりあえずアサルトで、装甲は……そのままでもいいです。」

「わかった、では少し待ってろ。」

さっきバレットと言ったがバレットとは弾丸のようなものでそれ単体では特になにもないが火薬を爆発（バレットの場合オラクルポイントにバレットに注入する）させ飛ばすことによって威力をだすみたいな感じだ。あくまで例えだが、

「来たぞ、ほらバスターブレードは重いから気を付けろよ。」

「ありがとうございま……す!？」

重っ！何これめっちゃ重い！バーデルさんやソーマさんはこんな物を振り回してるのか!？

「なんか危なげな感じたが……今からでも変えられるぞ？ 変えるか？」

「大丈夫です。ちょっと慣れさせてから訓練を開始してください。」

「ふむ……わかった。今から10分後に訓練を開始する。1分前になつたら連絡する。」

「了解です。」

――10分後

『では、模擬アラガミを出現させる。危険と判断したら高台に逃げろ、いいな？』

「はい。」

『では始める。』

バツ！

「グルル……」

「なんかオウガテイルに似ている……な？」

ズキン！

「くっ……」

何だ？何だか心の奥底からなにかが出てきそうだ……

「ガアア！」

「ちっ！」

胸から出てきそう何かを抑えながらオウガテイルモドキの攻撃をス
テップで避け側面から薙ぎ払いを喰らわす、

ザシュッ！ブシャー……

赤い液体が出てきた。なんかリアルだな

「グウ……」

モドキはダウンしてるな、今の内に出来るだけ切ってダメージを稼
ごう。

ダウンから立ち直った瞬間に奴は力尽きた。

『生体反応の消滅を確認……よし、次は“捕喰”についてだ。』

『捕喰はアラガミを喰らい神機解放状態になることだ。捕喰にも二通りあり1つは通常の捕喰、アラガミの力の一部を持ったアラガミバレットを3つ手に入る他バーストモードになれる時間も長い。』

『もう1つはコンボ捕喰というもので攻撃の終わりに捕喰をするというものだがこれだとアラガミバレットは1つしか入手できないしバーストモードになれる時間も短い』

『しかしながら隙が少ないので安全といえれば比較的安全だな。逆に通常の捕喰は隙が大きいので注意しろ。』

「はい、」

『ではもう一回模擬アラガミを出現させる。捕喰とコンボ捕喰を意識して戦え。』

「はい」

バッ！

「ガウウ……」

まずはダウンさせて普通の捕喰を狙うか。神機を銃形態に変え火属性のSサイズの弾丸撃つ。数発で奴はダウンした

「そら……喰いな！」

ガブウ！シユピイーン！

体が若干光り力が溢れてきそうだ。それと同時に何かわからない物もより強く感じた。

「グウ……」

「これは……いける！そらよー！」

バキィ！

「ガアア……」

足を斬り転ばせたあとチャージクラッシュでトドメをさした。

『ふむ……中々だな。最後にこれまでの技術を駆使して倒してみろ。』

「ガルル……」

「さっさと倒すか……」

正直ちょっと疲れてきた。ただでさえ重いバスターブレードを振り回してるんだから余計だ。

「ガアア！」

「うお！？」

ガキン！

危ねえ。咄嗟にガードできたからよかったもののこれが本番だった
らヤバかったぞ

「訓練とはいえ油断したらやられる……か？」

ザシュッ！

さっきと同じく転ばせチャージクラッシュでトドメをさした。

『まずまずだな……今日の訓練は終了だ。休んどくように』

「はい。」

あー疲れた。飯食べたら今日は休むか

第4話 初陣

「昨日の模擬訓練の後ツバキさんから近々実際にアラガミと戦うらしい。早すぎね？コウタはやっとな模擬訓練に入ったというのに

」

「翔？」

「へー？……タツミさん？」

「そんな声だすなよ、話しかけたこっちがビビったわ。」

「いや、急に話しかけてきたから……」

「その前に何回か話しかけてみたんだけどな。……緊張してんのか？」

「それはもちろん。模擬訓練以上に」

「あつはは、まあ肩の力抜いて生きる事を考えとけば死なないさ。なんせツバキさんがこんなに早く新人を実際に出すのは初めてだもんな」

「初めて？」

「ああ。大抵3週間ぐらいなのにお前は一週間とちょっとだしな、そんだけ期待してんじゃないのか？」

「期待って……」

「まあツバキさんは使えない新人を出撃させるような人じゃないかな。翔は死なないとツバキさんに思ってもらったんじゃないか？」

「成る程……頑張ってみます。」

「おう、頑張れよ。じゃな」

「それでは、」

俺は死なない……か

「まあ死ぬ気なんてさらさらないがな。」

『ピーピー、第一部隊の夜神翔は出撃準備をしてエントランスにて待機するように、』

っとお呼びか、じゃいきますか。

—エントランス

「あ、リンドウさん。支部長が見かけたら来るようにって言っ
ましたよ。」

「オーケー、見なかった事にしておいてくれ。」

そんなんでいいのかリンドウさん……あんた第一部隊の隊長だろ。

「よお新入り、改めて言うが俺は雨宮リンドウだ。まあ堅苦しいの
はどうでもいい。とりあえずとつと背中を預けられるくらいに育
つてくれ。」

「言われなくてもわかってますよ。」

「ははは、そりゃ心強いな。」

「あらゝ。もしかして新しい人？」

「あーサクヤ君。いま厳しい規律を叩き込んでるんだから、ちょっ
とあっちへ行つててくれ。」

「了解です、上官殿。」

サクヤと呼ばれた女性は手を降りながらどこかへ行つた。つか露出
たけえな

「じゃ、いくぞ。」

「はい。」

―贖罪の街

「さてと、始めるぞ。命令は3つ。」

「死ぬな、死にそうになったら逃げろ。そんで隠れる。運がよければ不意をついてぶっころせ。」

「あ、これじゃ4つか。」

「あつて……随分いい加減ですね……まあそれが一番なんでしょうけど。」

「そうだな。じゃいくぞ。」

まずは策敵からだ。今回のターゲットはオウガテイル一匹の討伐らしい。……余計な感情は持ち込むな、まずはきっちりミッションをクリアして生還するのが先決だ。

しかしなんだ？ 模擬訓練の時に感じた感覚がより強く感じる……今はまだ大丈夫だけでもっと強くなれば……やばいな。

「おつといたぞ。とりあえず俺が引き付けるから隙をみて斬りつ…
…翔？」

「……へっ！？なんすか？」

「いや、オウガテイルが見つかったから言っただが……大丈夫か？」

「一応大丈夫ですけど……」

「そうか、無理だけはするなよ。そんじゃいくぞ！」

「はい！」

リンドウさんが敵を引き付けている間に神機を銃形態に変え模擬訓練の時に撃ったバレットをアラガミに向けて撃つ。バレットが銃身から放たれアラガミに着弾する。もちろん一発で怯むわけもなくそのまま二発、三発と続けて撃つ。OPが無くなりかけたと同時にやつは蓄積ダメージが大きくなったのか転けて大きな隙ができた。

つてかよくみればリンドウさん戦いに参戦してないな、まあ自分が戦えばオウガテイルぐらいすぐに終わってしまうから当然なんだろうけど、

隙だらけの奴に向かってチャージ捕食（通常の捕食）を喰らわす、バーストモードになりバスターブレードを振り回す。重いので思うように動けないがバーストモードのお陰で多少はましになっている。

「ガアア……」

トドメに横に薙ぎ払いを頭から尻尾にかけてくらしオウガテイルを討伐した。

「ふう……」

「よし、討伐完了だ。なかなか筋がいいぞ、」

「そんなことないですよ。」

事実結構汗かいてるし緊張のせいかつかれてる。それに比べてリンドウさんは陽動だけとはいえ汗1つかいてないように見える。

「いや、大抵の新人は途中で油断して俺が討伐したりするんだが前は一人で討伐できたしな。」

「なるほど、」

「それに……いや、なんでもない。」

「？、わかりました。」

迎えに来たへりにのりアナグラに戻った。

第5話 フラゲへし折り（前書き）

わかる人は既にわかると思います

第5話 フラグへし折り

あれから色々なアラガミと戦った。ザイゴートというアラガミは飛行能力があるらしくまた大きな1つ目玉が特徴でそれを生かし策敵範囲が広くさらに他のアラガミを呼び寄せることもあるようだ、

グボログボロというアラガミはなんと水中はもちろんマグマの中でさえ泳ぐらしい。どうなってるんだよ

コンゴウという背中に砲台のような物がある猿は音に敏感で神機を剣から銃形態に変えた音にも反応してきた、その時同行したのが新人で同期のコウタだけだったため若干不安だったがなんとなくなった。砲台からの空気砲を連続で喰らったのはヤバかったけどな

しかしいつも同行したメンバー・・・まあコウタとかリンドウさんとかサクヤさんとかにミッションが終わって数分はなんか驚いた顔になってたな、なんでだろうか？

まあその内無くなるだろうと思いきにしなでいた

そして今日はソーマさんとなんかナルシストで貴族のお坊っちゃん気取り（実際そうなわけだが）のエリックとオウガテイル三体と蛹みたいに動かずでレーザーをだすコクーンメイデン二体の討伐だ。場所は確か鉄塔の森だったっけか、

鉄塔の森は昔は発電所かなにかだったらしいのだがアラガミの出現により発電所としての機能は完全に停止し森のように建物だけが残ったため鉄塔の森と呼ばれてるらしい

「さて、今はその鉄塔の森にいるんだよ」

ただいまエリックとソーマさんと一緒にいる。もちろんミッションの為ね

「やあ、君が新人君かい？僕はエリック。君も僕の華麗な動きを見習いたまえ」

「はあ……」

見た目はタンクトップに短パンとさらに刺青、サングラスに茶髪と。かなりチャライ

それにウザイ、さつきから華麗華麗としつこい。ちなみに使用神機は銃タイプの旧型でブラストっぱい

「んで、あっちにいるのがソーマ。口調はわるいけど気にしないで」

「はあ……」

ソーマさんは浅黒い肌に白い髪でフードを被ってる。使用神機は多分剣タイプの旧型でバスターのようだ

「！。エリック、上だ！」

「えっ……うわあー！」

ソーマさんが言った瞬間にオウガテイルが上から飛びかかってきた。エリックは驚きのあまり腰をぬかしている。ソーマさんはオウガテイルを仕留めようとしているが間に合い無さそうだ

いけるか……？迷ってる暇はないな

ガキイン！

「え……？」

「なっ……」

「……なんとか間に合ったか」

奴がエリックに飛びかかる前に装甲を展開し防いだ。今日はバックラーにしとして正解かな

「ソーマさん！早く！」

「お、おう！」

ザシュッ

ソーマさんの一撃で奴は力尽きた

「……ふう」

「あ、ありがとう。新人君」

「俺は新人じゃなくて夜神翔って名前です」

「じゃあ翔君。ありがとう」

なんだかんだで礼儀はしっかりしてるのかこいつ

「とりあえずミッション終わらずぞ。」

「はいはい」

「待ちたまえ！僕の華麗なるバレットをセットするまで……………」

スルーしてソーマさんについていった。華麗なるバレットとかいつてたがただのモルターだった、しかもオウガテイルとクローンメイデンの弱点じゃない神属性で。意味がわからなかった

結局ミッションはソーマさんの圧倒的な攻撃であっけなく終わった。強すぎだろ……

帰投中のヘリの中でふと思った

「そういえば……」

「どうかしたのかい？」

「いや、何でもない」

「シレッとタメ口だね……まあいいや」

実は今回はいつもくる変な物がこなかったんだ。なんでだろうか？

サカキ博士にでも聞いてみようかなと思いながら帰った

第5話 フラグへし折り（後書き）

さて、エリック生き延びたわけだが今後の出番はあまり無さそうですね

じゃあなんで生かしたんだよ？という質問が来そうだけどまあそこはね、うん、気にしないでね↑

第6話 戦神の目覚め

「よっ、仲間を庇った英雄さんよ。今日も元気だな」

「英雄なんかじゃないですよ。神機使いとして当たり前的事をしただけです」

先日……まあエリックをギリギリで助けたただけだがそれがアナゲラ中で話題になってるらしい

「なにいつてんだ。『エリックに飛びかかったアラガミをチャージクラッシュで真つ二つにした！』ってなってるのに」

……ちよつとまって

「今、チャージクラッシュで真つ二つにしたって？」

「ん？ああ、確かそういつてたが……」

「誰がですか？」

「コウタとエリック。」

あいつらか……盛大に脚色しやがったな

「あー、とりあえず今日のミッションをいっておくぞ。」

「今日はシュウの討伐だ。やつは全体的に固いから弾かれて隙がで

きないように注意しろ」

「はいっす。」

「一応仲間にエリックとカノン、あとはバーデルを入れとくが……カノンには注意しとけよ」

「？、わかり……ました」

データベースによるとシユウは飛びはするが滑空するだけのアラガミで掌からエネルギー弾を発射したりするアラガミらしい

そしてやっぱり固いらしいが足は破碎属性……まあブラストが得意な放射やモルター系のバレット、バスターブレード系には弱いらしい。リンドウさん全員破碎属性持ってますよ……

「じゃ、いきますか。」

ミッション開始のアナウンスがあったため仲間と共に出発した

―煉獄の地下街

「さすがにあついな……」

「まあ無事生き残って帰投しようぜ」

「あのっ、ご迷惑かけるかと思いますがよろしくお願いします!」

「華麗なる僕に任せておきたまえ」

バーデルはやはり真面目だ。まあシュンとかみたいになぶざけたりするよりはマシだけど

カノンちゃんは謙虚だ。迷惑をかけるのは俺のほうかも知れないのに
そしてエリックは相変わらずだ。その内Mになりそうだな

「じゃ行きますよー。」

「おう」

「よろしくお願いします」

「華麗なる僕の動きを見てなさい」

エリックは無視して策敵開始。あ、今回同行したメンバーはタメ口
でいいとの事。他の神機使いにも聞いてくれるらしい、ありがたいな

煉獄の地下街は前は地下鉄として運営されてたっぽくてアラガミが

出現すると避難民が逃げる道筋として活用されてたみたいだが今はアラガミにも見つかり熔岩が溢れる地下になってしまった。壁にアラガミらしき物があるがこれは地球の核さえも捕喰しようとしたアラガミが膨大なエネルギーに耐えきれず消滅し壁の一部になってしまったという説が有力らしい

「ヴヴ……」

「っと居たな。」

策敵をしているバーデルとエリックに連絡しカノンちゃんと一緒に交戦状態にはいる。

まずはから空きの足に横斬りをくらわす

ガキイン！

「なっ！？かてえ！」

振り抜こうとしたら普通に弾かれてしまった。反動で身動きがとれない所に手刀が降り下ろされる。や、やられ……

ドン！

「おぶっ！」

シュウの攻撃が当たる前に何かに当たり吹っ飛ばされた。助かったけど痛い

「射線上に入るなって、私言わなかったっけ？」

「は？」

ドン！ドン！

「ガヴウ……」

「あっはははは！ゴミみたい！」

「翔！大丈夫か？」

「大丈夫だけど……カノンちゃんのあれはいつたい……」

「ああ……後で説明するからまずはこいつを討伐するぞ」

「了解つと」

「華麗なる僕のバレットを喰らえ！」

「せいっ！はあ！」

エリックがカノンちゃんと共に足元を狙いバーデルが翼らしき部分を狙うて感じた。俺は神機を銃形態に変えバーデルに誤射しないよう注意しながら氷属性のバレットを撃ってる。さっきみたいに弾

かれたりしたらヤバイからな

しばらくして足が結合崩壊しシユウは大ダウンした。神機を剣形態に変えチャージ捕喰を喰らわす

バーストモードになり結合崩壊によって柔らかくなった足を斬りまくる。翼と知らない内に頭も壊れてたっぽいが気にせず隙をみてチャージクラッシュを叩き込みシユウを討伐した

「ふう、」

「お疲れさ……」

「え……」

「ど……どうしたんだい？翔？」

皆して俺の顔を見ってくる。……なんか顔についているのだろうか？

「どうした？俺の顔になんかついてるのか？」

「いや、目がなんか紅くなってるし顔になんか模様が……」

「目が紅く……充血してるだけじゃないのか？顔に模様なんてそんなできる訳がない」

まあなんか顔に違和感的なのも微妙にあるんだけど

「でも……あつ、消えた。」

「本当だね、何だったんだろう?。」

「俺に聞かれても」

「サカキ博士なら何か分かりそうだな」

「あー確かに」

「じゃ、サカキ博士に聞くといい事で帰りますよ。僕の華麗なる肉体を洗わなければならないからね」

「はいはい、それはそうとバーデル。」

「なんだ?」

「カノンちゃんのあの豹変ぶりは……」

「ああ……あいつは戦闘になると性格が普段と真逆になるんだよ。本人は自覚はあるみたいだが……」

「可愛い顔して恐ろしいな……リンドウさんの言ってたのはそれか」

「何してるんですか?早く行きましょ」

「しかしあの二重人格が一部の人に人気らしい。」

「マジか……変態だな」

「否定はしない。」

その後も雑談しながらアナグラに帰投した。カノンちゃんの話題になったのでそこそこ面白かった

第7話 覚醒（前書き）

翔の基本使用武器はバスター、スナイパー、シールドに決まりました。

第7話 覚醒

「ふむ、これといって異常はないみたいだね。」

サカキ博士に頼み検査してもらったが特に異常は無いと、なんだつたんだろうか？

「まあこれからそのような事があればスグに連絡するように」

「わかりました。それでは」

パタン

「……やれやれ、これはまた面白い観察対象が増えたね」

部屋にもどりゆっくりしているとヒバリからミッションの以来が、ソーマ、コウタ、サクヤさんと共に贖罪の街にてコンゴウ一体とザイゴート三体、コクーンメイデン二体を討伐してほしいとのこと。多くないすか……

―贖罪の街

「さーて、今日も楽しいお仕事だ。命令は死ぬな、それだけだ」

「え、それだけ？」

「いちいち突っ込んできると身が持たないわよ。」

「自分で出した命令だ。自分が守るこつたな」

「おう。それに何度も言うぞ、特に1人で勝手に死に行くような奴にはな」

途端にリンドウさんの顔が引き締まる。それもそうか

「ちっ……」

「1人を覗いて、1つになってるみたいで何よりだ」

そついい全員俺の方を向く。新型と旧型という違いはあるが同じ神機使いだろ……？

「冗談だ。そんな悲しい顔すんなって」

「はい……」

「あー……とりあえず死ぬなよ？」

「それはわかってます。」

「そうか、じゃあ俺はデートに行くとするか」

「まずは俺に女の子を紹介すんのが先じゃないっすかねー？」

「コウタには妹がいたでしょ。」

「バレたか」

ブーブー！

全員が音のした方を向く。リンドウさんにメールらしい

「はやくこないと拗ねて帰るぞだってさ。じゃ、ここは任せた。」

「おいっす。」

「早く帰ってきてね、」

「ふん……」

リンドウさんを見送った後サクヤさんの指揮でコウタとサクヤさん、ソーマと俺で別れて策敵する事になった

「……」

ザッ、ザッ

「……」

ザッ、ザッ

無言の間が続く……息が詰まりそうだな。

「！、いたな。」

「ええ、」

居たのはコンゴウとコクーンメイデンだ。幸いまだ気づかれてはいないようだ

「俺が近くで攻撃するからお前はバレットでも撃つてろ。」

邪魔だから遠くにいろということだろうか？ 考え方によっては安全な場所から攻撃しろって事にも捉えられるが

「わかりました。」

遠距離用に作ったバレットをセットしスコープモードにする。遠距離用と言ってもただ飛距離が長い只のレーザーだ。

ソーマが捕喰をコンゴウにすると同時に俺はコクーンメイデンに射撃をする。撃った時の音で既にコンゴウには気づかれてるだろうがソーマとの戦いに必死なためこちらに攻撃はしてこない。

OPが無くなったため神機を剣形態に変えステップしてからの縦斬りを食らわしOPを回復しダメージを稼ぐ、事前にバレットでダメージを与えてたためコクーンメイデンはすぐに力尽きた。連絡によると残りはコウタとサキヤさんが相手をしてくれてるようだ。つまり、コンゴウだけに集中すればいいわけだ

「せーの……………くたばれ！」

ザシュッ！

隙をみてチャージクラッシュを食らわし尻尾を結合崩壊させる。ここまででは順調だったのだが、結合崩壊させられた怒りからかコンゴウは猛攻撃を仕掛けてきた。当然避けきれぬわけもなく回復薬を使う間もなく連続で攻撃を食らい呆気なく俺は力尽きた。もちろん死んだわけではなく仲間にリンクエイドされれば大丈夫なわけだが、一対一の状況では辛いものがある

「うおっ！」

ソーマが油断したのか攻撃をガードし損ね回復薬を使う途中でまたも攻撃を食らい体力がヤバめな感じになっていた

まずいぞ……最悪のパターンだぜこりゃ、

くそっ……動けよ……仲間を助けるんだ！動けよ！俺の体！！

ザッ！

「ゴウウ……」

なんとか立ち上がりコンゴウを睨み付ける。しかし神機を杖代わりにたっているような状態なので一撃でも食らえば間違いなく殺されるな……

「なっ……翔！？」

ソーマが目を開き驚いた顔をしている、それと同時にコンゴウは若干怯えるような素振りを見せた。

……そういえばあのざわめきが一番強くなってる気がする。…だめだ……抑えられな……

スウウウ……

「……邪魔だ、」

ドスッ！

「ガアア！！」

神機を奴の顔面に突き刺す。よほど痛かったのかすぐに力尽きた

ズウウン……

「殺った……か……」

ボタン！

「おい、翔！翔！！」

俺はそこで意識を失った

第8話 ざわめきの正体（前書き）

更新遅れました！すいませんです。

第8話 ざわめきの正体

「クソッ！まずいな……」

目の前には怒りで活性化しているコンゴウとそれにやられた翔の姿がある

ソーマが本気を出せばすぐに片付くが倒れた仲間にも早くリンクエイドをしないと本格的にヤバくなるのでなかなか本気を出せない。

ザッ！

「おい、翔！？」

翔は立ち上がりコンゴウを睨み付けているがとてもではないが戦える状態ではなかった。

「ゴウウ……」

しかしソーマが驚いたのはそこではなく翔の目が紅く輝き左目の近くにも紅い瘢痕が出来ていた事だった。

それを見たコンゴウは怯えているようだった。まるでライオンに狙われた兎のように

「……邪魔だ。」

ドスッ！

「ガアア！」

翔がコンゴウの額に突き刺した神機の一撃でコンゴウは力尽き同時に翔も倒れてしまった。そしてオウガテイル等を片付けたコウタ、サクヤ組が駆けつけた。

「ソーマ、翔！大丈夫？」

「あ、ああ。サクヤ、翔を頼む。コウタ、ちょっと話がある」

「わかったわ。」

サクヤは翔を背負い帰りのへりとの約束の場所へと向かう。

「それで話ってなんすか？」

「……あの新人、翔のことだ」

「ん……なんかあったの？」

2人とも5分ほど話していたが時間きたのでサクヤがいる場所に向かいアナグラに帰投した

―アナグラ、医務室

「……………ん……………」

「翔！？大丈夫か？」

「…コウタか、それにソーマまで。ここは……アナグラか？」

「そうだよ。倒れたのに急に立ち上がってコンゴウを一撃で倒したんだって？」

「……そーなのか？」

記憶に全くないんだが……

「そーなのかって……」

「翔、後でサカキの部屋にこい。じゃあな」

「あ、はい。」

ソーマはドアをあけ出ていった。

「んー、全く身に覚えがないな。」

「どこまで覚えてる？」

「神機を杖代わりに立った時まで、」

「ふーん。まっ無事でなによりだわ」

「お前がそんな台詞を言うとは、」

「何気に酷くね！？」

「だって普段からバガラリーと妹の話しかないしさあ……」

「だってバガラリー面白いし、」

「俺にはわかんねえや、じゃあサカキ博士の部屋に行ってくる。」

「うん、じゃあな」

―サカキ博士の研究室

部屋に入ると何やら機械を弄ってるサカキ博士とソーマ、リンドウさんがいた。

「来たねえ。じゃ、これを腕輪につけて」

「はいっす。」

コードを腕輪の穴に差し込み椅子に座る。何が始まるんだろうか？

「それ、ポチッとな」

ブーン……

機会が何やら怪しげな音を出しながら起動した。今のところ特に何も感じない、若干痛い

「ふう……確定だね。」

「何がですか？」

「ざっくり言えば君は類い稀な能力を持っている。そうだな……そのままだけど神殺し（ゴッドキラー）とでも名付けようか」

「神殺し……」

「君が今日コンゴウの額に神機を突き刺して一撃で仕留めたりオウガテイルを鉄パイプで倒したりすることが出来るのはそれのおかげさ、胸のざわめきはそれが原因のようだね」

「……」

俺にそんなのが……？でも、

「何でこいつがそんな能力を持つてるんだ？」

「それだ、それが分からないんだが……心当たりはあるかい？」

心当たり……あつ

「……恋人が俺を庇って目の前で捕喰されたせいかも……」

「ふむ……失礼だがその恋人の名前は？」

「……如月サラです」

「確かに、外部居住区に登録が確認されてるね。」

「どんな人だったんだ？」

「サラは……とにかく優しくかったです。少ない食料を他の子供達に分ける事さえありました……自分だって腹が減ってるっていうのに。」

「凄いな……このご時世、そんな心を持つのは滅多に居ないぞ」

「はい、サラは皆から慕われてました。そんなサラと付き合えてるって事は誇りでした。俺もいつかサラ見たいになりたかった……」

「……あーとりあえずだ。この事は姉上には俺から言っとくが、他の奴はどうする？」

「部隊長には伝えといたほうがいいだろ、俺達がいつも同行するわけじゃないし」

「そつすね、そついや第三部隊の部隊長って誰なんだろ……」

「確かジーナだったような気がするが……」

「じゃあ俺から言っておきますね。」

「おう。サカキ博士、神殺しの研究頼みますよ？」

「もちろん、これからどんどん調べさせてもらうよ。実に興味深いからね」

「あはは……それじゃあおいとまさせていただきます」

「じゃあな」

「ミッションを終えたら逐一私に報告するように、メール等は駄目だよ。情報が漏れるかもしれないからね」

「わかりました。それでは」

榊博士の部屋を出てタツミとジーナに俺の妙な能力を説明する。タツミは驚いた顔をしたが信じてくれたのか解ってくれたようだ。ジーナは……わからん。相変わらず何を考えているか解らない、いまいち掴めない人だ

説明を終えバスターブレードの扱いの訓練をしているとツバキさんが来た。やっぱり神殺しの事だろうか……？

「翔、話はリンドウからきいた。……大丈夫か？」

おお……あのツバキさんからそんな言葉が出るとは

「はあ……まあ今は特に異常は無いですが。」

「そうか、無理してアラガミに喰われるなよ。勢いのある新人が油断し捕喰されるなんてよくあることだからな。」

「流石に死ぬつもりはありませんよ。死んでしまったらゴッドイーターもクソもないですからね」

「口だけは立派だが、その心得は評価しよう。」

「ありがとうございます。それでは訓練に戻ります」

「ああ、気を抜くなよ。」

ツバキさんと別れこんどは模擬アラガミを相手に実践的な練習をする。今回もオウガテイルに酷似した模擬アラガミを相手にする。バスターでは小回りが効かず大振りになりがちなので自由自在に操れるようにしなければいけない

その点ソーマとバーデルは凄いだろう。特にソーマ、一部の人間から『死神』等と言われてはいるが彼と同行したメンバーは比較的新人が多く油断し捕喰されやすいということがわかった。彼だけが無傷で帰ってくるというがそれはアラガミを圧倒的な強さでねじ伏せてやられる前にやっているからだと思う。なにせオウガテイルやコクーンメイデンを瞬殺できる強さの持ち主だからな

訓練を終え食堂で飯を食っているとタツミとジーナ、それにリンドウさんが来た。

「一緒にいいかしら？」

「あ、どうぞ。」

「いやー今日も働いた働いた。」

「ヒバリがお疲れさまっていったぞ」

「マジか！？よし、明日も頑張るぞー！」

「ヒソヒソ（嘘よね？）」

「ヒソヒソ（そういうわけじゃない。ヒバリじゃなくて清掃のおばちゃんがいったんだ）」

「ヒソヒソ（結局嘘じゃない）」

燃え上がってるタツミにひそひそ話をするリンドウさんとジーナさん。賑やかだな

「それはさておき翔。話がある、あとで俺の部屋にこい」

「……神殺しの事ですか？」

「ああ。」

やっぱりか

「とりあえず飯を食べてみようよ。話は後でいいじゃない」

「そうだな。じゃ食おうぜ」

他愛もない話をしながら飯を食べタツミの部屋にいく。どっという話になることやら……

第8話 ざわめきの正体（後書き）

神殺しはこの作品では極力『ゴッドキラー』と読んでください（笑）

第9話 これからの掟

「で、なんで俺の部屋なんだ？」

「だって俺の部屋は酒臭いだろうしジーナの部屋は置いてるものが気になって仕方ないんだよ。」

「タツミの部屋もかなり個性的だけどね」

飯を食べた後タツミの部屋にて話している。ジーナの部屋はどんなんだろうか・・・？

リンドウさんの部屋はいかにも部隊長といった感じで俺達新人とはかなり豪華だった。確かに酒臭いが、

タツミの部屋はというとそれなりにいいんだが玉にヒバリの写真やポスターが……写真にも盗撮らしきものがあるがポスターはどっから持ってきたんだ……

「じゃ、本題に入るぞ。……ミッシヨンの時暫くはソーマ、リンドウさんにジーナ、それに俺の内誰かと行動すること」

「無茶な行動はしないこと」

「私達以外には他言しないこと」

「これが決まり事っすか？」

「ああ、少なくとも神殺しが詳しく明らかになるまではこれは守ってもらおう。」

やっぱりか…まあ当然といえば当然だが。

「ジーナは自分も無茶をするなよ。」

「はいはい、頑張ります。」

ジーナは狙撃の名手だが無茶な行動をよくするらしい。それさえなければ階級とかももっと上になりそうなのに…まあ本人はあまり出身には興味は無いらしいのだがもったいないな…

「そんじゃ、このメンバーで軽くミッションでもいきますか？」

「いいわね。」

「いいぜ、翔もいいよな？」

「もちろん、大丈夫です。」

「おっけ、ヒバリちゃんに聞いてくるぜ。」

そついいタツミは出ていった。つかこのメンバーで軽くといったら俺とか役に立つのだろうか？

「私達もいきましょ。」

エントランスにつくとヒバリが若干迷惑気な顔をしながらタツミと話していた。

「どうしたタツミ、丁度いいミッションはあったのか？」

「あ、リンドウさん。こちらのミッションがいいかと…」

リンドウさんが話しかけた瞬間助かったと言わんばかりの顔をしてミッションを提示した。

「鎮魂の廃寺でオウガテイル二体にコクーンメイデン三体か…おっけ、このミッションに俺とジーナ、タツミと翔で頼む。」

「解りました。…セッティング完了しました。すぐにでもでれます、」

「ありがとよ。じゃあ行くか？」

「ええ、」

「はいっす」

「オッケーだぜ」

— 鎮魂の廃寺

「じゃあいくぞ。俺とジーナ、タツミと翔で策敵してくれ。発見次第戦闘に入ってくれ、くれぐれも死ぬなよ？」

「いつもどおりね、それじゃいくわよ。」

二手に別れ策敵する。

…しかし会話がないな、コウタとかなら腐るほどあるんだろうが

「なあ…その能力って何か発動の条件とかってあるのか？」

とか考えてたらタツミの方から話をふってくれた。嬉しいがまた内容が…その能力とは神殺しのことだろう

「さあ…ただアラガミを見たときになんかなんか込み上げてくるものはあつたけど…」

「アラガミに対する異常な殺意とか…」

「…ありそうで怖いな。あ、いたぜ。」

視線の先にはオウガテイルが二匹いた。

…氷の墮天種であることを覗けば、

「ええー…」

「墮天種とかきいてねえぞ。偵察部隊め、サボったな。」

それはかなりの問題ではないのかと言いたかったがやめた。こういうのがたまにあるからだ、

それと墮天種というのは通常種と違い環境に適応したアラガミのことだ。ここ鎮魂の廃寺は雪が降っており寒いのでそれに適応し氷の

墮天種になったというわけだ。逆に熱ければ炎の墮天種にもなりうる

「とりあえず俺が攪乱させるからお前は隙をみて捕喰、リンクバーストしてくれ」

「了解、」

言った瞬間にタツミはオウガテイル墮天種（氷）に向かって突撃しショートブレードの機動力を生かし走り回っていた。そして俺はチャージ捕喰ではなくコンボ捕喰をし即座に銃形態に変えアラガミバレットをタツミに渡す。

通常の捕喰よりも強力なバーストモードになる、そしてより機動力が強化されさらに攻撃力も上がりタツミが装備している神機についている剣がオウガテイル墮天種（氷）の弱点の炎属性を持っていることもありすぐに殲滅できた、あとはコアと素材の回収だ。

「ふう、まさか墮天種がくるとはな。」

「もしコクーンメイデンも墮天種だったら……」

「まああのふたりがコクーンメイデンにやられるとは思えないんだけどな、万が一の事を考えて連絡してみる」

そついいタツミは残りの2人に連絡をとった。しかしすぐに終わってしまった

「問題なく倒したとき。ベースで集合だそうだ、」

「とくに問題は無しか。」

ベースに向かう途中、地響きのような音がした。なにかまたアラガミがいるのだろうか

「おい、あれ…」

タツミが指差した方向にはクアドリガがいた。何か食べておりこちらには気づいてないようだ。

「なんでこんなやつが…また偵察部隊のミスか…？」

クアドリガは巨大化した戦車のようなアラガミでミサイルを出したりロケット弾を発射したりする人工的な兵器を捕喰したアラガミだ。圧倒的な火力を持つが極低温にはかなり弱い。

「流石にこんな大型のアラガミを見落とすのはないとおもうが…とりあえず信号弾撃ってリンドウさんとジーナに連絡しとけ、それまでは持たせるぞ。」

「あいよっ。」

タツミがクアドリガに攻撃したのを見計らい信号弾を上空に撃つ。流石にオウガテイルとか中型と違い強い。特に装備や技術が整っていない俺みたいな新人にはきついが、

「こいつまだできたばかりかもな…イマイチ賢くないというか強くないというか…」

そう、まだオラクル細胞が集まってできたばかりのアラガミなのでまだ対処できる。まあ油断したら喰われるが。

「タツミ、翔！無事か？」

そして遅れてリンドウさん、ジーナがやって来た。信号弾の意味と戦闘音で気づいてくれたのか、

極東支部、いや各支部の中でも随一の実力を持つリンドウさんに防衛班の部隊長として長年頑張ってきたタツミに狙撃の名手であるジーナが揃えばまだ成長段階のクアドリガは即座に倒されてしまった。やはり強い。

「特別ボーナスとかもらえないかなあ…」

「まあこいつのコアを無傷で持ち帰れたら出るかもな」

実際無傷で取り出すのは二回に一回の割合で失敗するのだが

「とりあえず帰るかー、軽いミッションのはずなのに軽くなかったな。」

「まあ私は楽しかったけどね。」

「いい経験になったしな。」

こういう不測の事態にも容易に対処できるのがいいんだがそれは経験でしか身に付かないだろう。

アナグラに帰投し神機の点検をリツカに頼みサカキ博士に今回の神殺しについて伝え飯を食う。今回は偵察部隊のミスをカバーしたということでもいつもより少し多く報酬を貰えた。なので今日の飯はい

つもより豪華な気がする、

「お、旨そうだな。隣いいか？」

来たのはコウタとカノンちゃんだ。こいつらいつの間に仲良くなつてんだ…？

ちなみにカノンちゃんは聞いたところカノンでもカノンちゃんでもいいとのこと。

「カノンちゃんはこの間のシュウ戦以来だっけ？」

「はい！あの時は私のせいでご迷惑を…」

「いやいや、あの時は逆に助かったよ。やられてたかもしれないしな」

「でも」

「とにかく、迷惑でもなんでもないって。心配しなくてもいいよ、」

「うう…ありがとうございます。」

「翔って何気に色男だよな。」

「なんかいったか？」

「いや何も。」

こんなやりとりをしながら飯を食べ終えた。するとカノンちゃんか

らお願いがあるとのこと、なんでも料理を手伝って欲しいらしい。
俺料理はそんなに得意じゃないんだが…ちなみにコウタはバツサリ
拒否したらしい。

とりあえず断る理由もないので時間を合わせて休暇をとった。それ
にしてもどんな料理を作るんだろうか？

第10話 料理って難しい(前書き)

まず一言、約1ヶ月も放置してしまいすみませんでしたああああ!!

…そ、それではどうぞご覧してください。

第10話 料理って難しい

「で、何作るんだ？」

先日、カノンちゃんと一緒に料理を作るという約束をしたので休暇を取り現在に至るのだ。

「はい！お世話になってる方々にクッキーを焼こうかと、」

「ふーん、仲間思いなんだな。」

「いやあ……私誤射が多いですからそのお詫びも兼ねてあげようかなど。」

カノンちゃんは神機の適合率は非常に高いらしいのだが技術がイマイチ伴ってないとかツバキさんがいつてたな。素質はあるから経験を積みばいい神機使いになるとも言ってたけど、

「料理名とかあるのか？」

「ボマークッキーです！」

「……………」

大丈夫なのかそれ、食べた瞬間爆発とかないよな？まあカノンちゃんはプラスチック使いだから爆発系が大好きなんだろう。きつとそうだ、そうに違いない。

「じゃ、つくろうか。」

「はい！」

……と、いうわけで作り始めたんだがこれがまた上手いの何の、俺が呼ばれた意味が分からなかった。で、今は作った生地を休ませるところだ。ちなみにボマークッキーはココアクッキーだそうで材料集めに苦労したみたいだ。

「なあ…なんで俺を誘ったんだ？」

「それはもちろん翔さんと仲良くなりたいたいからです！それに一人でつくるより二人、三人の方が楽しいですし。」

「ふっん…」

そっぴや確かにカノンちゃんとはミッション中とか以外あまり話した事は無かった気がする。

「そっぴやさ、カノンちゃんってよく誤射とかしてるよな？」

「うっ…恥ずかしながら…」

「ただ単にモルターとかぶっぱなすより弾丸とかに破砕系のバレットを組み合わせて撃ったほうがいい気がするんだけど、どうだろうか？」

「なるほど……でも私そんな事出来ませんよ…」

「ジーナとかサクヤさんとかに教えてもらったら？エリックはいいとして、」

「そうですね……このクッキーを渡す時に聞いてみます！」

「おう、頑張れ。」

で、生地を休ませるのが終わり生地を伸ばして型抜き（爆弾の形？）をしオーブンで焼いていく。大体15〜20分ぐらいで焼けるそう
だ、

「なあ、余った材料とかない？」

手伝いにきたのはいいが特に何もなかったので自分も何か作ってみようと思ったのだ。

「はあ…卵と砂糖ぐらいしかありませんね。」

「卵と砂糖……卵焼きが出来るか…？」

材料的にはかなり厳しいが仕方ない。とりあえずやってみよう。かなり無謀だが、幸い油がまだあるみたいだから多少はましかな？

「とにかくやってみるか。失敗したらその時はその時だ。」

卵を割りきるようにといていく、途中で砂糖を加える。熱したフラ

イパンにサラダ油をなじませ、卵を少しずついれていく。後は卵の様子をみながら巻いていくだけだ。

「よっ…と、」

「おおー」

若干焦げてしまったが見た目は大丈夫だ。味は分らんが

「ちょっと味見してみるか、」

「そうですね、ちょうどクッキーも焼けたみたいです。」

卵焼きを切りカノンちゃんにも一つ渡し、クッキーも一緒に試食。

「おっ……旨いな。サクサクしててほのかに甘いな、」

「卵焼きも美味しいです！私甘い卵焼き好きなんですよ！」

「そうなんだ。しかし良くできてるよな」

「翔さんだつて上手いですよ。初めてですか？」

「いや、サラと一緒に作った事があるんだ。サラも甘い卵焼きが大好きだつたんだよな…」

「えっと…そのサラさんは翔さんの恋人ですか？」

「ああ、ちっさい時からいつも一緒にいたよ。」

「へえ、どんな人なんだろ…」

「写真ならあるぞ。見るか？」

「はい！」

そっつい首にかけているロケットペンダントを開け写真をみせる。

「凄く……可愛いです。」

「サラをみたやつは大抵そいうんだよな。」

「だって女の私からみても可愛いんですもん。」

「料理は全然だったけどな、」

アラガミが現れる前にサラの手料理を食べたんだが死ぬかと思った。
どうやったらああなるのが不思議。

「おっと、料理が冷めない内に早く持っていこうぜ。」

「はい！」

— エントランス

「おっすカノンに翔！出来たのか？」

「コウタか。出来たぜ、」

「お口に合うかどうか分かりませんがどうぞ。」

「サンキュー。」

「なんかいい匂いが…」

「本当ね。何かきたのかしら？」

リンドウさんにサクヤさんがきた。ラブラブだなおい、

「うまつ！何これめっちゃうまい！」

「なんだなんだー？お、俺も貰うぜ。」

「ふむ、じゃあ俺も」

続々と集まってきた。どんだけ食に飢えてんだと思ったのは内緒結果からいうと好評だった。まず俺が料理できることにびっくりしてたみたいだが、男でも料理ぐらいできるから。

また暇があったら作ってみようかなと思った。

第11話 新型到来

「翔、連絡がある。本部から新型二人がくるらしい、俺共々同じ新型として面倒を見てやってくれ。」

「リンドウさん、新型ってまだかなり少ないんじゃない？」

「ああ、どうやら支部長が連れてきたらしい。なんか意図的な気がするんだよね……」

「ついに先輩か。まあ先輩面できるほど強くないけどな、今日の二二〇〇時にくるらしい」

「エントランス」

「ロシア支部より、ここ極東支部に配属されました。アリサ・イリニチナ・アミエーラです。」

「本部より配属になりました、神夜 紅葉くれはです。」

「アリサは訓練ではトップクラスの成績を納めている。紅葉も将来性がある、おい抜かれないよう注意することだな。」

「すっげー可愛いじゃん！な、翔？」

「……えっ？ああ、そうだな……」

「はあ…よくそんな浮わついた考えで生き延びてくれましたね。」

「ちょっと！アリサさん！」

「とにかく、アリサと紅葉は今後リンドウと共に行動すること。では皆、持ち場に戻れ。」

「ねえ、ロシアってかなり寒いんでしょ？あ、でも最近は異常気象で暑くなってるとか…」

「すみません、失礼します。」

「わ、私も用事があるのでこれで…」

「逃げられたなコウタ。」

「万年ヒバリさんに逃げられてるタツミに言われたくないっす。」

「言っなあ！」

「……翔、ちょっとこい。」

「…お、おう。」

ーソーマの部屋

そっぴやソーマの部屋って初めてきた気がする。ターミナルはディスプレイが壊れ壁には射撃のあとが…

「聞きたいことがある。黒髪の方の新型…お前が言っていたサラにそっくりじゃないか？」

「っ!？」

「その様子からして本当みたいだな…」

確かにそうだ、見たときは目を疑ったほどでそれほどそっくりだったからだ。髪の色と髪型に身長、雰囲気、声こそ違ったものの少しの差だった。

「リンドウはあまり反応してなかったみたいだが気づいてるだろう。」

「だろうな、気づかないほうがおかしい。」

「紅葉とは仲良くできる気がしない…」

「何でだ？」

「だってさあ…サラに似すぎてどーしても意識してしまうし仮に二人つきりにでもなってみる。平常心なんか飛んでくつての」

「どんだけサラとラブラブだったんだ…」

「うるせ、とにかく紅葉は任せる。アリサはまあなんとかなるだろう。」

アリサはアリサでプライド高そうだしいくら訓練で高成績を収めても実践で活かせなければ意味がない。まあそこらへんは慣れもある

んだろうけど

「話しはそれだけだ。俺はミッションが入ってるから行くぞ」

「おう。」

ソーマの部屋を出て訓練所に向かう……はずだったのだが見事にミッションに連行された。まあやることも無かったから別にいいんだけど

「あら、ソーマが珍しく誰かと一緒にいるわ。何かあったのかしら？」

「あいつも心を開いてきたんだろ。いいことだ」

サクヤさん、リンドウさん、へんな誤解を生まないでくれ。

――嘆きの平原

今回はクアドリガの討伐だ。俺、ソーマ、カレル、カノンちゃんだ、ちなみに前にカノンちゃんに新しいバレット云々っていつてたが結局駄目だったみたいだ。あの誤射率は健在なののか、

このエリアはドーナツ状になっていて真ん中はでかい竜巻みたいなのが渦巻いていてそこはアラガミが通ることもある。それに複数同時討伐のミッションではこのエリアでは分断が難しいのだ、まあ今回は単体だから大丈夫だけど。

エリアの上部で彷徨っているクアドリガを発見。回りにコクーンメイデンがちらほらいる、まずは雑魚掃討からかな。

クアドリガに気づかれないようにひっそりとコクーンメイデンを倒していく。しかし気づかれてしまい乱戦に突入。まあコクーンメイデンはあまり動かないからいいんだけど、

コクーンメイデンを討伐しクアドリガに向き直る。巨大な鋼鉄の体に前足はキャタピラーで後ろ足はなにか鎧みたいなのでおおわれている。胸あたりには顔がありそこが開くことでトマホークを発射するが発射後にわずかな隙ができるのでそこに向かって斬ったり撃つたりすれば大ダメージが見込めるが下手すれば返り討ちにもあう。

カレルがミサイルポッドの破壊、カノンは足に攻撃、俺とソーマは胸部装甲を破壊しにかかった。カノンの攻撃が響いたのか胸部装甲を開け大ダウンし隙だらけになった、すかさずチャージ捕喰をしチャージクラッシュを喰らわす。するとクアドリガは雄叫びを上げ怒りで活性化した、怒濤の攻撃をしてくるが被弾するほどじゃない。神機使いなめんな

「終わりだ、」

ズドン！という音とともにクアドリガは息絶えた。今回はなかなかハードだったかな、

「おい翔、最後のチャージクラッシュやたら強くなかったか？」

言われてみれば最後にチャージクラッシュを決めた跡をみるとかなり奥深くまで叩き切っていた。

「リンクバーストをしてたわけでもないですし…」

「まあとどめの一撃って事で力が入ったんじゃないか？」

「だな。」

―アナグラ、サカキ博士の研究室

「……以上が今回のミッションです」

ミッションを終えいつものようにサカキ博士にミッション内容を報告。いい加減飽きてきたのは内緒

「ふむ…無意識に神殺しが発動してたとか？」

「無意識に？」

「あと少しで憎きアラガミを叩きのめせると無意識に思っちゃって神殺しが発動したり…なんてね。」

「無意識にそんなこと思うとか軽くホラーですよ、」

「とにかく、また調べてみるよ。今日はもう帰っていいよ」

そしてサカキ博士の部屋を出た瞬間誰かとぶつかった。なんだこのどっかのゲームみたいな展開

「あ…」

「な…」

見るとそこにいるのは紅葉だった。一番顔を会わせたくないやつがくるなんて…

「す、すまん！」

とりあえず謝っておいてダッシュで逃げた。あー焦った。

しかしなんで紅葉はサカキ博士のところ！？講義とかならまだ時間じゃないし…まあいいや。腹が減ったから食堂でなにか食おう

―食堂

「翔、一緒に食おうぜ。」

食堂にきていたコウタと一緒に飯を食べている。コピー食品だけどやはり旨いものは旨い

「なあ、昼間なんかあったのか？」

「何が？」

「いや、話しかけても反応が悪かったから。」

「ああ…」

どうしよ、話してもいいんだけどまた面倒な事になりそうだし…まあ後でいいか

「いや、ちょっと眠たかったただけだ。気にするな」

「うーん…気になるけどまあいいや」

コウタは相変わらず変わらないな。いいやつだから変わったら困るんだが

夕食を食べ終わり部屋で本を読んでいるとドアをノックした音がした。誰だ？こんな時間に

「こんばんは。ちょっと話いいですか？」

「あ…ああ。」

いたのは紅葉とアリサだ。挨拶か何かか？
とりあえず部屋にいれる、しかし紅葉はそっくりだな…

「改めて挨拶にきました。アリサです、よろしくお願いします。」

「紅葉です、よろしくお願いします。」

挨拶か、1人1人に挨拶してるんだらうか。

「翔さんはここにきてどれくらいなんですか？」

「多分2ヶ月ぐらいか、まだまだ新人だな。コウタも同じくらいだ

る」

「コウタさんもなんですか、なんか意外。」

「何で？」

「だって同期の翔さんとなんか雰囲気違いますもん、」

「そうか？コウタはコウタなりに頑張ってるぞ、」

「あんなにふざけてて頑張ってるなんて思えません。」

否定はしないがコウタみたいなやつがいなかったらつまらないしこんな世の中なんだからポジティブなやつが1人2人いたほうがいいだろ、お先真つ暗なご時世なのに

……と言いたかったがやめておいた。また面倒なことになりそうだし、

「あれがあいつの取り柄さ。そのうちわかるさ」

「どーだか…ではこれで失礼します。」

「私もこれで、」

アリサもいつかわかるかな…まあいいか。

新人達がどう育つのか気になりながら寝た

第12話 新型との仕事

贖罪の街

「今日は新型三人とお仕事か。足引つ張らないようにするんで頼むわ。」

今日は贖罪の街にてシユウ二体の討伐。アリサとリンドウさん紅葉と俺でだ、

リンドウさんが足を引つ張るのはまずありえないことだけど突っ込んだら負けか。

…そしてアリサはと言うと、

「旧型は、旧型なりの仕事をしていただければいいと思います。」

こんな感じだよ。度々ミッションに行つてたんだが相変わらずだ、もう少し思いやりというかなんというか…

紅葉はというと普通にいい子。一緒にミッションをするのは初めてだが素直なんだよな、今のアリサとは対極に位置するみたいな

「ははっ、せいぜい期待にそえるように頑張るわ。」

そつといいリンドウさんがアリサの肩に手をおいた瞬間

「きゃあっ!!!??」

もの凄い勢いで後ろに飛び退いた。どうしたんだいったい

「おーおー、見事に嫌われちゃったか。」

「あ…す、すいません。何でもないです」

今のは流石に謝らなきゃ不味いよな。まさか男性恐怖症？……なわけないよな。

「冗談だ。…よし、アリサ。混乱しちまった時は空をみるんだ。んで、動物に似た雲を見つけるんだ、きつと落ち着くぞ。」

「な、なんで私がそんなことを…」

「いいから探せ、な？見つけたら合流してくれ」

「……わかりました。」

おお、了承した。ってかもし戦闘中に混乱しちまって落ち着くために動物に似た雲を探してたらかなりの確率で喰われちゃうよな？

「よし、翔、紅葉、先にいくぞ。」

雲を探しているアリサをおいて先にいく。しばらく歩いてからリンドウさんが話しかけてきた

「アリサの事だな…どうやら事情があるらしい。まあこんなご時世だからそれなりの悲劇を背負ってるっちゃあ背負ってるんだが…」

「同じ新型のよしみだ、仲良くしてやってくれ。」

「私もいます!」

「おっと、そうだったな。二人ともよろしく頼むぞ」

贖罪の街 廃ビルの中枢部

「グウウ…」

今は一体目のシユウを討伐したところだ。アリサもやっと見つけたらしく今から合流するみたいだ、何を見つけたのかあとで聞いてみよう。

「お待たせしました。」

きたきた、走ってきたのか息が上がっている。オラクル細胞のおかげですぐに回復するだろうけど、

四人一緒に策敵する、二組に別れて策敵しては?と提案したのだが安全第一ということでこうなった。まあリンドウさんはいいとして俺はまだ新人の域だし、生き残る事を考えればこうなるか

全く見つからず周囲への警戒も薄くなってきた気がする。紅葉なんて普通に歩いてるし、

「紅葉、あまり呑気になるなよ。いつどこから襲ってくるか解らないから四六時中警戒しとけ、」

「は、はい！」

リンドウさんが注意をいれた、正論だな。

そうこう言ってるうちに二体目のシユウを見つけた。が回りにオウガテイルやザイゴートの死体がわんさかある。中型のアラガミすら見当たらなかったのはこいつが捕喰したからなのか

「雑魚がいなくてのはやりやすくていいなっ！」

リンドウさんが後ろからチャージ捕喰をする、俺も続いてかぶりつく。

紅葉とアリサは共に射撃をしているのでアラガミバレットを一つづつ渡しリンクバーストさせる。

銃形態から剣形態に切り替え刀身を横薙ぎにして下半身にあたるようにする、前にシユウと戦った時は弾かれてしまったがバーデルにコツを教えてもらい弾かれずに振りきれ。

しばらくして下半身が壊れ、攻撃がかなり通るようになってきた、しかし不味いとも思ったのか逃げてしまった。何か喰って回復する前に見つけなきゃな…

「逃げられたか…」

早く追いかけましょう！とアリサが言う。

「そーだな……2人組に別れて搜索するぞ。見つけたらすぐに信号弾を撃つてくれ」

ってわけで俺と紅葉、アリサとリンドウさんに別れて探す。なんで

この組み合わせなんだ…

2人とわかれ策敵する。しかし会話が無い……なんて事を思ってる
と紅葉から話をふってきた

「あの…ちよつと聞きたいんですけど。翔さんてなんでゴッドイーターになつたんですか？」

「それは……自分のためかな。」

え？と返されたが何でもない、とうやむやにした。そして紅葉にも
同じ質問を試してみた

「私は……守るべき家族や人のためにゴッドイーターになりました。」

「守るべきものがあるのはいいことだな。俺にはそういうのが無い
から…」

これまたえ？と返されたが別に、とまたうやむやにした。話す時が
きたら話してもいいかな

そうこうしてる間に遠くのほうで信号弾が打ち上がった。見つけて
くれたか。

急いで信号弾が上がった方に向かう、たどり着くと既にシユウは力
尽きていた。なんてこったい…

「おう、遅かったな。」

力尽きたシユウにコアの回収や素材を剥ぎ取るために捕喰形態にさ

せている。アリサは周囲を警戒してたが俺達を見つけるやいなや暴言の嵐…俺達に多少は非があるとはいえ仕方ないよな？信号弾が上がったところからかなり遠い位置にいたんだし。

それとアリサに何の動物の雲が見つかったんだ？ときいた所『熊』が見つかったらしい。よく見つかったな

帰還し、神機をメンテナンスに出して自室に帰った。

第12話 新型との仕事（後書き）

これ執筆するときに気づいたんだけどシユウって『シユウ』じゃなくて『シユウ』だったことに気づく

ずっとシユウだと思ってたw

第13話 蒼穹の月

「翔、お前贖罪の街で何か視線を感じたことは無いか？特に1人の時に。」

ソーマが珍しく話しかけてきたが俺は視線なんて感じたことは無いのでないと返答した。
残念そうに項垂れるソーマ、感じたことは無いんだから仕方ないじゃないか。

「ソーマ、翔。昼から私とコウタでミッションにいくわよ。」

「はいっす。」

今回は贖罪の街にてヴァジュラというかなり大型のアラガミの討伐だ。手強い相手だが油断せず隙を突けば倒せる相手らしい、ツバキさんの意見だから信憑性はあるよな？

―贖罪の街

「はりきっていくぞお！」

一二〇〇時、ミッション開始だ。地味にコクーンメイデンもいたので先に掃討しておいた、
別れて策敵していたソーマから連絡がありヴァジュラを見つけたみたいだ。すぐに現地向かう

「ガオオ！」

たどり着くと四足歩行の虎のようなアラガミがソーマたちと戦っていた。首から赤いマントのようなものがあり牙が片方欠けていた。

そしてマントにはどんな攻撃も効かなさそうだが、弾丸もレーザー等の遠距離武器はもちろんソーマのバスターブレードでさえ弾かれていた。反則くさいなおい、

足を重点的にきり、転倒を狙う。しかし相手もアラガミ、タフな上にかなり大型な部類に入るやつだから効いてる気がしない

「いい加減に……しろ！」

コウタがスタングレネードを使いヴァジュラを一時的にだが行動不能にさせた。ナイス！といいながらチャージクラッシュをソーマとともに喰らわす。さらにジャンプして上から叩き切り、コンボ捕喰をしてバースト状態にする。これが効いたのか雄叫びを上げ怒りで活性化した。動作も一層速くなり目で追えなくなってきた。

隙が少ないステップ斬りも外れてしまう、これは銃形態のほうがよさそうだな、

神機を銃形態に変えレーザーを撃つ。射撃は慣れてないのでかなりの確率で外れるが全く当たらないというわけではないので地味にダメージは与えている気がする。

OPが無くなったので神機を銃形態から剣形態に変えて斬っていく。先程のコウタやサクヤさんとの一斉射撃が効いたのか動きがさつき

より鈍くなっていた、なので剣形態での攻撃も当たる当たる、もう銃形態にしくてもいいかな。

「グオオ…」

ソーマの一撃でヴァジュラは倒れた。なかなか強かったな。

ミッションも終わりアナグラに帰投していると先頭にいるソーマが声を上げた

「…何？」

「リンドウさん？なんでここに？」

「お前ら…」

そこにはアリスとともにリンドウさんもいた。

「どうして同一区画に二つのチームが…一体どう言うこと？」

特例を除き、同一区画には二つ以上のチームはいてはならないという決まりがあるのだがそれを無視しての出勤だった。

「さて、考えるのは後にしよう。お前達は外を警戒、俺たちは中をみってくる。いいな？」

そついい二人は教会内に向かっていった。

―贖罪の街 教会内。

二人が教会内部に入り、警戒していると割れたステンドグラスからヴァジュラに似たアラガミが不意にやって来た。骨格は似ているが体色がヴァジュラとは違い青いマントにどこか人に近い白い顔をもっていた。

リンドウはその謎のアラガミを見るとすぐに臨戦体制に入り、アリスに後方支援を任せ戦闘に入った。外にいる翔達はまだ気づいてないようだ

しかし後方支援を任されたアリスは戦闘に加わらず傍観していた、リンドウが声をかけても微動だにしない。

「パパ…？ママ…？……やめて…食べないで…」

アリスは目の焦点があつておらず謎の言葉をいいながら銃形態にした神機をリンドウとアラガミに向けていた。

「（そうだ！戦え！打ち勝て！！）」

「（こう唱えて引き金を引くんだ…）」

「アジン……ドウヴァ……トゥリー……」

「（そうだよ…そう唱えるだけで、君は強くなれるんだ。）」

アリスの脳内に誰かの言葉が響く。それに誘われるかのように指を神機の引き金に添える。

「（こいつらが…君の両親を食べた…アラガミだよ…！）」

アリサが見ていたモニターには今リンドウが戦っているアラガミに加えてリンドウの顔も写っていた。

そして神機の銃口も自然とリンドウのほうを向いていた。

「（混乱しちまった時は、空をみるんだ。落ち着くぞ。）」

ふとリンドウの言葉がアリサの頭を過る。それを聞き正気に戻ったのか引き金を引く寸前に銃口を上に向けた。

「いやああああ！！やめてええええ！！！！」

瓦礫が崩れる音とともに異変に気づいた翔とサクヤが駆けつけた。

「あなた…いったい何を！？」

教会内に入る出入口がアリサの射撃によって完全に塞がれてしまい、リンドウは閉じ込められてしまった。

「違っの…あたし…そんなつもりじゃ…」

アリサの不可解な言葉に痺れをきらしたサクヤがレーザーを瓦礫に向けて撃つ。しかし瓦礫はびくともせずレーザーは消失してしまっただ。

「お前らあ！何やってる！さっさとアリサを連れてアナグラに戻れ！！」

「リンドウさんはどうするんですか!？」

「悪いが、俺はこいつらの相手をしてから帰るわ。…配給ビール、とつといてくれよ。」

「駄目よ!私も残って戦うわ!」

「バカいつてんじゃないねえ!サクヤ、お前がいなきゃ誰が纏めるんだ!ソーマとコウタ!退路を開いとけ!」

「っ!……分かったわ。リンドウ…必ず帰ってきてね。」

「無茶言つぜ……」

「リンドウさん…絶対に戻ってきてください!」

そうはいつが周りを今リンドウが戦ってるアラガミに囲まれてる中で退路を開くのはかなり難しい。よほどのことがなければ脱出は厳しいだろう。

「翔!生きること諦めんなよ。生きてれや良いことは必ずある。生きて生きて生き延びろよ!」

「リンドウさんこそ……アナグラで待ってますからね!」

その瞬間、瓦礫の向こうから音がした。最悪の事態を想像してしまいそうになりながらも5人はなんとかアラガミを撃退しアナグラに

帰還した。

第14話 リーダーの不在

昨夜の出来事……リンドウさんが贖罪の街にて行方不明になって1日。アナグラに帰還してツバキさんに事情を説明し、本部に連絡をしてもらった。すぐさま捜索隊が派遣された。サクヤさんにコウタ、ソーマ以外のアナグラメンバーはまだこの事実をしらない。正式に発表されるのは今日の予定されているミッションが全て終わってからだとか、

アリサはというと病室で何か治療をされていた。かなり錯乱してたので戦線復帰はおるか、日常生活にも支障をきたすかもしれない。出来れば戦線復帰、少なくとも日常生活には問題ないレベルまで回復してほしい。

そして俺はというと朝一番のミッションを終え、昼飯を食べているところだ。ミッション中に同行していたタツミやシュンから心配されたが大丈夫と言い張り、なんとか平静を装った。

サクヤさんは自室にでもいるのか姿が見えない。それもそうか……最愛の人が行方不明になってしまったんだから。

コウタは一見いつもどおりなのだがやはり不安なのか1人になると普段は絶対に見せないような顔をする。……なんで知ってるかというと影からこっそりみてたからな。

ソーマもいつもどおりだがいつも以上に人と接するのを避けてる気

がする。ミッション同時にも全く話さなかったし、

「部屋でじつとしてもあれだな……訓練所いくか。」

訓練所

ここも随分お世話になった気がする。実際はまだ1年も経ってないんだけどな。

いざ始めようと思ってる就先客がいた。サクヤさんだ、神機を持ちかなり遠くの的に確実に狙撃していた。この距離で当てるのはかなり難しくないか…？

それを糸も容易く命中させているのだからこの人の腕はかなり高いということのを改めて認識させられる。

「翔、きてたのね。」

「ついさっき来たばかり何ですけどね。お疲れさまです」

そっぴや……サクヤさんは朝からここで訓練してたのだろうか？ だったら見かけなかったのも頷けるんだが。

「やっぱり部屋でじつとしてるよりも何かをしてるほうが気が紛れるわね。」

俺と同じ理由で来てたのか。そこらへんは一緒なのかもな。そっぴですなと適当に返事をし、模擬アラガミを相手に戦闘を始める。

ヴァジュラを相手にした時に全く攻撃が当たらない時があったので、そのために相手の行動を先読みしようとしているがなかなか上手くいかない。熟練者ならある程度は読めるんだろぅが俺はまだ経験が浅いからわからないな。

1時間ぐらいしたところで少し休憩に入る。次は銃形態の練習をするかな

同じスナイパーのサクヤさんやジーナさんに教われれば少しは上達も早くなるんだろぅけどサクヤさんはなんか気まづくなりそうだしジーナさんはミッシヨンに出かけてるから無理なんだよな、だから自分でやるしかないんだよな。

銃形態の訓練を終えてエントランスに戻る。ちょうど今日のミッシヨンが終わったのか全員が集合していた。

「全員いるな。ミッシヨンお疲れ様だった。今日集まって貰ったのは少し連絡があるからだ。」

「薄々気づいてる奴もいるだろうが……第一部隊リーダーの雨宮リンドウがMIA（作戦行動中行方不明）になった。搜索隊は既に派遣されている」

ツバキさんがそう言った瞬間、場の空気が凍り付いた。

「冗談……じゃないですよね？」

「当たり前だ。冗談でこんなことをいうわけないだろう。」

連絡はそれだけと言ってツバキさんはエレベーターに乗りどこかにいってしまった。

場がざわつきだす。誰も予想出来なかった事が起きてしまったからざわつくのも無理はない。

「……そもそもなんでリンドウさんは行方不明になってしまったんだ？同行者はいたはずでは？」

当然の疑問だ。同行者はアリサだが今はあんな状態だから聞けるはずもない。

他にいたのは俺達以外にはいないだろう。一応事情を説明したが納得してないみたいだ。

それどころかリンドウさんがM I Aになる原因を作ったアリサを責めるような態度をだす奴もでてきた。

「とりあえず、今日はもう休みましょうか。どうするかはまた明日決めるってことでいいわね？」

ジーナさんの提案で今日は解散になった。

第15話 復帰への兆し

あれからリンドウさん搜索部隊のメンバーとなんとか会い、話したりしたが一向に見つかる気配がないという。なかなか成果があらがない事に半ば苛立ちもあるのか口調も少し荒れていた。

ミッションまで時間があつたのでアリサの見舞いに行こうと思い病室に向かうと

「ほつといてよ！私の事なんかほつといてくれれば良かったのに！」

病室からアリサの声が響く。それと同時にツバキさんの治療指示もされていた。今は引き返したほうが良さそうだな。

「ああ、君か。」

不意に声をかけられる。振り向くと工事用の安全ヘルメットを被りタバコをくわえた中年のおっさんがいた。アリサの専属医師としてついてきたオオグルマだっけか、医師なのにくわえタバコってなんなのよ。

「見舞いに来てくれたのは嬉しいがここは帰って貰えないかな？彼女だって、今の状態はあまり見られたくないだろうっしな。」

言われるまでもなくその場を後にする。さて、今日のミッションも頑張ろう

エントランス

「本日の任務を、当該地域のアラガミ一掃に変更する。」

ミッション開始前にツバキさんからミッション内容の変更が告げられる。今日のミッションはリンドウさんの搜索だったので全員が疑問に感じる。

「なお、アリサは本格的な治療が必要なため暫くの間、戦線を離脱することになる。」

「最後に……本日を持って、神機 及びその適合者であるリンドウは、消息不明、除隊として扱われる事になった……以上だ。」

「「なっ!」」

アリサの事にも驚いたがそれ以上の衝撃だ。すぐさまサクヤさんが抗議する

「上層部の決定だ。それに、腕輪のピーコン、生体信号共に消失が確認された。」

「未確認アラガミの活動が活性化している状況で、生きているかわからない人間を探す余裕はない。」

「っ!」

ツバキさんの一言でサクヤさんは完全に沈黙した。サクヤさんは少し困惑気味だったが頭を冷やしてくるといい部屋に戻っていった

「サクヤさん、大分疲れてるみたいだね…」

「ああ…」

「にしても、アリサのやつどうしちゃったんだよ。同じ新型なんだし、翔と一緒に居てやったほうがいいんじゃない？」

コウタに言われ、ヒバリにアリサへの面会はできるかて聞いてみたところオオグルマがいるときに限り面会可能だという。早速許可を取り病室に行く

病室

「ああ、君か。アリサのお見舞いかな？来てくれたのは嬉しいが当分起きる気配はないよ。効果の高い鎮静剤が届いたからね」

病室に向かうと相変わらずタバコをくわえたオオグルマが立っていた。説明してくれたのはありがたいがぶつちやけこいつはなんか信用ならないから鵜呑みにはあまりしたくない。

ベッドには患者用の服に着替えたアリサが横たわっていた。呼吸に合わせて胸が上下するのがわかる

起きる気配がないのなら話しかけてもあまり意味がない気がする

でもないので手を繋いでみる。

その瞬間

「!!!!!!」

かなり一瞬だったがフラッシュバックが頭を過った。俺にそんな記憶はないのでアリサのだろう。

フラッシュバックには黒いアラガミらしきものに誰かが捕喰させられているとその黒いアラガミの顔、そしてリンドウさんの顔がうつった。

「あれ……ここは……私……どうして……」

声のしたほうを見ると目を朦朧ながらもアリサが目を開けていた。そしてオオグルマがかなり驚いた顔をしながらでていった。

「今……あなたの……」

そう言い残しアリサはまた眠ってしまった。

じつとアリサに触れた手を見ている。しかし何もおこらない、まあ当たり前っちゃ当たり前なだけだな。

もう一度触ろうかと思ったがやめておいた。サカキ博士にまた聞いてみるか

エントランス

「教官！俺達もリンドウさんの搜索を手伝わせてください！」

「なんとも言わせるな、それについては正規の部隊が活動している。経過を待て」

翔達がミッションに行っている最中、タツミ、ブレンダン、カノンの三人がツバキにリンドウ搜索に向かわせて欲しいと訴えている。

「しかし！人数が多いほうが発見の可能性が！」

「リンドウさんは命の恩人なんです。だから、こんどは私たちが！」

「くどい！何度も言うが正規の部隊が動いている、上層部もこれ以上は人数を派遣できないと言っている。経過を待て」

三人は完全に打ち負かされ黙ってしまった。

「おい、てめえら」

端で見ていた元神機使いの百田ゲンが声をかける

「ツバキの目の前で、何人死んだか教えてやるのか…？」

「あ……」

「ましてや血を分けた弟だ。飛び出したいのはあいつのほうだろうに……」

同時刻、支部長室に向かう途中にある廊下にツバキはいた。誰もいない事を確認すると突然壁を殴り付けた。

「どこに言ったんだ……リンドウ……」

ツバキはかなり小声でそういい、肩が若干震えていた……

第15話 復帰への兆し（後書き）

なんか最近終わり方がよくわからない感じになってる気がするの
は気のせいではないはず↑

第16話 アリサの過去

「アリサ…まだ目を覚まさないんですか？」

「ああ、私はアリサがロシアにいたところから診てるんだが…これほど長く目を覚まさないのは初めてだね。」

相変わらず胡散臭そうなオオグルマが言う。俺はそういう医学知識は無いに等しいから嫌でも信じるしかない。……いやまあ全部鵜呑みにするわけじゃないけど

「私は少し席を外すよ。少し調べものがあるからね」

そういうオオグルマは出ていった。足音が聞こえなくなったところでアリサの手をまた握ってみる。前みたいにフラッシュバックが起ることを期待したのだが…

「……何もないか、やっぱりそうそう起きないよな。」

そうして手を離そうとすると、

「やめて…食べないで…」

微かにそう聞こえ、強く握ってきた。少し驚いたが強く握りかえすと

~~~~~

外部居住区 倉庫跡

『もういいかい』

『まあだだよ』

『もういいかい』

『まあだだよ』

『もういいかい、』

『もういいよ、』

『……………ガオウ!!!!』

バキィ!グチャ…グチュ…

『パパ…ママ…?やめて…食べないで…』

『グルル…』

『いやあああ!!やめてええええ!!』

アナグラ 神機適合検査室

『若い君は…さぞ自分の無力さを悔やんだことだろう。』

ドスン！

『うぐっ…うあああ！！！！』

『その痛みに打ち勝てば、君は親の仇を討つ力を得るのだ！』

『そつだ！戦え！打ち勝て！！』

アナグラ 医務室

『こいつらが、君たちの敵…アラガミだよ。』

『アラ……ガミ……？』

『そつだよ。こわーいこわーいアラガミだよ。そしてこいつが…』

『君のパパとママを食べちゃった…アラガミだよ…！』

『パパ…ママ…』

『君はもう、戦えるだろ…？簡単なことさ。こいつに向かって、引き金を引けばいいんだよ。』

『引き金を…引く？』

『そつだ…そしてこつ言つんだ。 ОДИН（アジン）・ДВА（ド  
ウヴァ）・ТРИ（トゥリー）…！』

『 ОДИН (アジン) ・ ДВА (ドゥヴァ) ・ ТРИ (トゥリー)  
… 』

『 そうだよ… そうとなえるだけで、君は強い子になれるんだ。 』

『 ОДИН (アジン) ・ ДВА (ドゥヴァ) ・ ТРИ (トゥリー)  
…… 』

~~~~~

「 なに… 今の？ 」

前より格段に長かったフラッシュバックが終わり、ぼーぜんとして
いるとアリサが起きた。意識もはつきりしている

「 今… 頭の中で、あなたの気持ちが流れてきて… まさか… あなたの
中にも？ 」

「 まあ… そうだな。 」

あの過去の記憶はアリサにとってはトラウマだからあまり根掘り葉
掘り聞かないほうがいいだろう。

と思ってたらアリサのほうから話してきた。止めてあげたほうがい
いのかも知れないけど正直気になるから止められないな

「 あの日… 私は、ちょっと親を困らせようとして、かくれんぼのつ
もりで、近くの倉庫に隠れていました。 」

「そしたら…突然、アラガミだ！アラガミが襲ってきたぞ！！って悲鳴に変わって……目の前でパパとママが…！」

頭を右手で押さえて苦しそうにしているアリサの手を握る。少しでもマシになればいいんだが…

「私をもっと早く気づいてれば……私のせいで…パパとママが…」

より手を強く握りアリサのせいじゃない、と言う。
するとまだ若干苦しうだが頭を上げてくれた。

「だから…私が新型神機の適合候補者だと聞いた時は、これでパパとママの仇を討てるって思ったんです。」

「そう、あの日…パパとママを殺したあのアラガミを…！」

そしてまた頭を抱え込んで苦しうに唸った。我慢仕切れずアリサの肩を抱いた、そういやサラにも似たようなことをやった事あったな。

「ごめんなさい…自分でも解らないの…！」

「大丈夫だ…無理しなくていいんだ。俺たち仲間がいる。もっと仲間を頼っていいんだ…」

「ありがとう……この前も私の手を握ってくれてたの…あなただったんですね…暖かい気持ちの流れ込んでくるの…解ったから……！」

その後アリサに自分の心の弱さを克服するために戦線復帰したら戦い方や戦術を教えてほしいと頼まれた。もちろん快諾し、その場を後にした

第16話 アリサの過去（後書き）

やっぱり感応現象の描写は苦手ですわ

第17話 レッド・アンタレス

「あ、翔さん。ミッシヨンの依頼がきてますよ。煉獄の地下街でボルグ・カムランの討伐依頼です」

「ボルグ・カムラン？どんなやつ？」

「えっと…全身が固い鎧の様なものに覆われており、合わせると顔のように見える強固な盾と尻尾にある鋭い針が特徴。極東支部では初めて確認されました。」

「ふーん。わかった、同行メンバーは？」

「ソーマさん、ジーナさん、カノンさんです。」

誤射姫ことカノンちゃんが……まあいいや

煉獄の地下街

「……で、ついて早々目の前にカムランじゃなくてコンゴウがいるのさ。」

煉獄の地下街に着き、俺とジーナ、ソーマとカノンに別れて策敵をしていると瓦礫をバクバク喰っているコンゴウがいた。カムランはどこいったんだ…

「知らないわよ。それより、早く構えて。あいつはもう気づいてるわよ」

そうだった。ジーナはコンゴウから距離をとり、狙撃を始めた。着弾したところがほぼクリティカルってすげえな。

俺も負けじとコンゴウの尻尾や胴体を切る。こいつは攻撃の予備動作が分かりやすいから楽だ。まあ最初は全然わからなかったが

チャージ捕喰で得たアラガミバレットを3つともジーナに渡し、リンクバーストさせる。コンゴウが自分を中心に風の衝撃波のようなものを出そうとしてたので、バックステップで避けたところをジーナがリンクバーストによってLvが上がったアラガミバレットを発射し、コンゴウは力尽きた。無惨にもコンゴウの顔面はかち割れている。あらまあ…

「ジーナ、ソーマたちと連絡はとれるか？」

捕喰形態でコンゴウの素材とコアを取りだしながらジーナに言う

「ちょっと待って……繋がったわ。…うん、うん。分かったわ。私たちも今から向かうから、それじゃ。」

ジーナは通信機を切った。

「ソーマたちはエリアKでボルグ・カムランと戦ってるそうよ。私たちもいきましょ。」

もう戦ってたのか。当然っちゃ当然だけど

エリアKに向かう途中でオウガテイルやらコクーンメイデンがいたので何匹か駆除しながらエリアKに向かった。

「オラオラオラア！吹き飛ばえ！」

エリアKに着くとやはりカノンが裏カノンになっていた。そしてソーマがそのモルター&放射連続射撃に当たらないようにカムランに強烈な一撃を与えている。盾らしき形をした鋏は結合崩壊し、自慢の鉄壁ぶりも崩れかけている。

カムランの攻撃後の隙に漬け込み、ステップ斬りからのコンボ捕喰でバースト状態になり、アラガミバレットが3つほどたまつたところで銃形態に変形させてアラガミバレットを放つ。口元にヒットし、カムランは大きくダウンした。すかさずチャージクラッシュを食らわし、ジャンプして上から叩き斬り、横に二回薙ぎ払う。そこでカムランのダウンがとけ、怒りで活性化した。通常時より固くなり、どこを切っても弾かれる。攻撃が通つてる気がしない…

仕方なくスタングレネードを使い、カムランを一時的に行動不能にする。

後ろに回り込み、甲殻のようなものに覆われていない尻尾の裏側にチャージクラッシュを叩き込む。するとカムランはひっくり返り、あえぎ声を上げながら力尽きた。

「終わったか……んじゃ、捕喰だ捕喰。」

コアと素材を回収しながらアナグラにいるヒバリにターゲットの撃破を報告する。ついでにコンゴウがいたことも合わせて報告していた。

アナグラ

「教官…私、やっぱり納得出来ません。」

エレベーター前にいたツバキにサクヤが話しかける。納得出来ないのはリンドウの搜索のことだろう。

「またその話か…上層部の決定だ。覆ることはない。」

「腕輪どころか…神機すら見つかってないんですよ…神機使いが行方不明になったら、神機が見つかるまで搜索されるのが通例じゃないですか…！」

「…あいつが居なくなっってからもう1週間以上になるんだな…」

「…生存の可能性は、限りなく0に近い…ましてや深手を負っている…」

「でも…でも…ツバキさん…」

「…サクヤ、お前は少し休暇を取れ。」

「え？」

「自分の顔を鏡で見てみる。何日も寝てないんだろう？」

「それは……」

「お前が弟を想う気持ちは、姉としてはありがたい。」

「だが上官としては別だ。コンディションを整えられない者は“死”を呼び込む。……わかるな？」

「……はい。わかりました、」

「最後に……お前は、もう少し回りを頼ることを覚える。」

「努力は……してみます。」

そう言い残し、ツバキはエレベーターに乗っていった。

アナグラ サクヤの部屋

休暇を取り、自室のソファで膝を抱えているサクヤ。

飲み物か何かないと冷蔵庫を開ける。中には配給ビールがたくさんあった。いつもはリンドウが自分の分の配給ビールを飲み干して、酒を飲まないサクヤの配給ビールを取りにくるのだが、今はリンドウがいないので貯まっていくな一方だ。

「本当……しょうがない人。」

ビールの山から1つ取り出す。すると底から何か黒いディスクのようなものが落ちた。

「何…これ。」

データベースを起動し、そのディスクを入れてみる。するとパスワードがかかっていた。

「これは……リンドウの？何で…」

しばらくそのディスクについて調べていると不意に部屋にノックが聞こえた。ハツとし、直ぐ様データベースの電源を切りドアを開ける。居たのは翔だった。

「なんだ君か…どうしたの？」

「えっと…少し話があって……」

部屋に上がり、話は何とサクヤが聞くと翔はアリサについて話始めた。

話終わるとサクヤは翔にお礼を言い、アリサのそばに居てあげてとお願いをした。

翔が部屋から出て足音が聞こえなくなるとサクヤは再びデータベースでディスクについて調べ始めた。

「そもそもあの日は、予想以上にイレギュラーが多かった……」

「あ……あの日のミッション履歴が消されてる？」

そう、リンドウが行方不明になった時のミッションが消去されているのだ。

「一体…何があったの…」

しばらく続けていたがこれ以上はパスワードがなければ調べるのは不可能と判断し、アクセス履歴を消去し、データベースの電源を切り、ディスクを机の上においた。

第18話 リーダー就任

「そっぴやさ、今の第一部隊のリーダーって誰になってるんだろうか？」

ふとコウタが言う。普通に考えればサクヤさんかソーマなんだろうけど……ソーマは実力はあるけど軍規違反が多いから上層部も悩んでるみたいだし、やっぱりサクヤさんだろう。

「今日のミッション前に新しい第一部隊のリーダーが発表されるみたいですよ。」

同じ新型神機使いの紅葉が話しかけてきた。どこ情報だときくとツバキさんからだという。以外に決まるの早かったな

「では、新しい第一部隊のリーダーを発表する。先に言うておくが、正式にリーダーに就任するのは予定されているミッションを無事に遂行できた後になる、」

「新リーダーは……夜神翔、お前だ。」

そう言われた瞬間周りの目が俺に向けられる。そっぴいの慣れてないから止めてほしいのが心の内なんだが……まあいいや。

無論、俺もびつくりしている。まだ極東支部に配属されて半年経つか経たないかってぐらいだったのに。

「第一部隊はこれから、鉄塔の森でミッションをしてもらう。なお、今回のミッションのアラガミは一段階上のアラガミなのでリーダーになったと浮かれて喰われないようにな。」

ツバキさんがいつてから周りから祝福の言葉や第二部隊リーダーのタツミから“これから同じリーダーとして頑張ろうぜ！”と言ってもらった。なんだか認めてくれたみたいで嬉しい。

シユンやカレルは悪態をついていたがカレルは“リーダーになったからって無条件に尊敬されるとは限らない。精々頑張ることだ”という忠告のような事を言われた。言われなくてもわかってる。

「じゃ、早速ミッションにいきましょう！」

コウタの提案にのり、早速ミッションの場所である鉄塔の森にいった。

鉄塔の森

「じゃあ翔。リーダーになった時の予行演習を兼ねて皆に命令を出してちょうだい。」

「いいっすね！翔、よろしく！」

「フン……」

「えーと……じゃあ俺とコウタ、ソーマとサクヤさんに別れてターゲットを捜索しましょう。見つけ次第信号弾を放ってください。」

「あと、一つ。何か忘れてるわよ?」

「え?他に何かあったんすか?」

「ええ。あなたたちも聞いたことはあると思うわ。」

「……ああ!あれっすか!」

「コウタは何なのかわかったのか?」

「うん。あれだ、初めてリンドウさんとミッションに行ったときに聞いたと思うよ。」

「初めてミッションに……あ、」

「わかった?」

「まあ、はい。“死ぬな、死にそうになったら逃げる。そんで隠れる。運がよければ、不意をついてぶっ殺せ”」

「正解よ。その命令を忘れないでね。」

「はいっす。じゃあ行きましょっか」

「しかし俺がリーダーなんてなあ。流石にびつくりしたわ」

「確かにな。でもま、それだけ期待されてるんじゃない？」

「期待されるの苦手なんだが…まあいいか。」

「あ、そうそう。翔のリーダー就任祝いに軽くだけどパーティをしようかと思うんだけど…好きな食べ物とかある？」

「好きな食べ物？んー……苺？」

「え……なんかすっげえ意外。」

「よく言われるよそれ…俺が苺を好きで悪いか。」

「いや悪いとは言わないけど……何で苺？」

「深い意味はない。それに大抵の物は食べれるし」

「へえ……ちなみに食べられない物は？」

「オクラとか納豆とかネバネバ系。」

「ええ！納豆嫌いなの！？」

「だってネバネバしてるし、正直言って美味しくないしな。」

「貴様全国の納豆好きに謝れ…」

おお、コウタが貴様なんていうの初めてきいた。この後しばらく納

豆についての討論が続いたのは内緒。

ヒューボン

「あ、信号弾。コウタ、いくぞ」

「はいはい。この話題は持ち越しかな…」

鉄塔の森 エリアD

信号弾が出たエリアに向かうとサクヤさんがサリエルの頭部を狙撃し、ソーマがバスターブレードの攻撃力を生かしてサリエルに猛攻を仕掛けてた。回りにザイゴートの死体もある。雑魚は粗方片付けたのか

「翔！全員に大まかでいいから命令を出して！」

「あ、はい。じゃあサクヤさんは支援重視で行動、コウタはとにかく撃ちまくれ。ソーマは俺と一緒に切り込むぞ！」

「おっけー！」

「言われなくてもわかってる…遅れんなよ。」

「なんか呆気なかったな。」

全員が集合してから5分ぐらいでサリエルを倒してしまった。流石に早くないか……一応今までより格上の敵だぞ？

「そりゃあ俺たちの華麗な連携プレーに敵うやつなんていないさ！」

「お前そんなに役立ってたか？」

「ソーマひどい！サリエル撃ちまくってダウンさせたじゃんか！」

「その分誤射も結構あっただろ。」

「カノン並みかもな」

「そんなに！？」

「とりあえず、コアを回収して帰るわよ。ソーマ、よろしくね」

ソーマがコアを回収して、サクヤさんがアナグラに連絡する。俺とコウタは駄弁りながら周囲を警戒する。警戒してるなら話すなよとかそういうツツコミがきそつだが気にしないでくれ

サクヤさんが連絡を終えて数秒後、ソーマもコアの回収を終えたみ

たいでこっちにきた。また喋りながらアナグラに帰投した

アナグラ

「リーダー就任おめでとうございます！」

紅葉を初めとして、アナグラメンバーが就寝前にお祝いパーティーを開いてくれた。

「あ、あの。これ……よかったら食べてください！」

カノンが花というか何というかよくわからない形のクッキーを差し出してきた。あとで聞いたのだがスモークッキーという名前らしい。命名したやつ誰だおい。味は予想通り、美味しかった。

パーティーが終わり、寝る前にアリサの様子を見に行こうと思い、病室に行こうとすると話し声が聞こえてきた。声からして紅葉だろう。何やら楽しそうに話している。アリサも大分落ち着いてきたかな

「邪魔するのも悪いし…帰るか。」

自室に戻り、服を着替えて寝た。

第18話 リーダー就任（後書き）

この話を執筆するまで紅葉の存在を忘れてた件
↑

第19話 戦闘訓練

「本日付で、原隊復帰になりました。また、よろしく願いします
……」

エントランスでコウタと話していると病室で着ていた白い服から赤と黒を基調とした服装に着替えたアリサがうつむきながら話しかけてきた。

コウタが実戦はいつからなの？ときくがまだ決まっていらないらしい。

「おいきたか。例の新人の片割れ、ようやく復活したらしいぜ。」

「ああ、リンドウさんを見殺しにした奴だろ。」

「ところがさ、あんなに威張ってたのに結局戦えなくなっちゃったさ。」

「口先だけの奴だったんだろ。笑っちゃうよな」

下から心ない言葉が聞こえてくる。つかあの2人あの時アリサを責め立ててた奴らじゃないか。

「……あなたたちも、笑えばいいじゃないですか。」

「俺たちは笑ったりしないよ。」

コウタがささず言う。その言葉にアリサは一瞬戸惑いを見せたが
またすぐにうつむいてしまった。気まずい雰囲気がただよう…

「あ、そうそう。リンドウさんを襲った新種のヴァジユラ、欧州支
部でも目撃例があつたみたいだね。このところ増えてるのは何かの
予兆なのかなー…なんて」

「……」

この気まずい雰囲気を打破しようとしたのだろうがより悪くしてし
まった。何でそういう話題を持ってきたんだよコウタ…

「（スマン、後は頼んだ。）」

俺の肩に手を置いたかと思うと小声でそういい、どこかにいつてし
まった。この状況をどうしろと…

「あの…この前頼んだ戦闘訓練…今から付き合ってくださいませんか
？こんどこそ、自分の意思で大事な人を守りたいんです。」

そう言いながらアリサが決意に満ちた目で見つめてきた。確かに頼
まれたのももちろん了承した。

ミッションを受注する際に俺とアリサだけでは危険だということで紅
葉も加えてのミッションとなった

嘆きの平原

「まずはシユウと戦いますね。何か策はありますか？」

「そうだな…シユウは全体的に固いからまずは下半身の結合崩壊を優先したほうがいいかな。まあ頭を狙撃できるなら銃で撃つのもありかも」

「私、撃つのは得意ですから頭への狙撃は任せてください！」

「おう。アリサは銃か剣のどっちが得意なんだ？」

「私は……銃形態のほうが得意です。」

「だったら、俺が前衛でアリサたちが後衛っていう配置になるな。」

「あと一つ。ヤバイと思ったらすぐに逃げる。これは守ってくれ」

リンドウさんの受け売りだけと言つといたほうがいいよな。

作戦会議も終了したので高台から降りてシユウを探す。ここはドーナツ状のフィールドになってるので探すのは容易だが分断がしにくい上に障害物が少ないからやりづらい。見通しがいいのはいいのだが体を隠せる場所が少ないのだ

「あ、いましたよ。」

アリサの視線の先には俺たちがいたところとは別の高台にシユウがいた。そういえば真ん中のエリアにはアラガミだけが通れる道があ

るんだっけか

「どうします？挑発して降りてくるのを待ちますか？」

「いや、確かああいう道はアラガミにとってはいくまでも通行用として使っただけだからすぐに降りてくるさ。」

シウウが降りてくるのを待つ間にアリサに基本的な戦術を教えた。まあロングブレードとバスターブレードじゃ大分差があるけど、

5分ぐらいたつとやっとシウウが降りてきた。なんか長かったな。

「このっ！当たれ！！」

紅葉が銃形態で頭を狙撃してるつもりなんだろうがことごとく羽と思われる場所に当たってしまい、頭に全くといっていいほど当たらない。

しかし攻撃は無駄では無かったらしくアリサが助走を付けてジャンプし、縦に回転切りをして羽に当てると結合崩壊した。

「捕喰します！」

ダウンしたシウウに俺、アリサ、紅葉でチャージ捕喰をする。アラガミバレットを2人に渡し、チャージクラッシュを二発叩き込む。

「ガアア！！」

シユウが悲鳴に近い声を上げながら猛攻を仕掛けてくる。なんかやけくそだな

「隙だらけですよ!」

アリサがリンクバーストしてLv3になったアラガミバレットを発射し、着弾した瞬間にシユウは倒れた。

「さて、アリサ。コアの回収頼む。俺はアナグラに連絡してくるから、」

「了解しました。」

「あー、あー。こちら翔。ターゲットのシユウの討伐を報告します」

『はい、ターゲットの撃破を確認しました。帰投準備をして……』

「どうかしたか?」

『いえ…近くに大型アラガミの生体反応がありましたから……』

「大型アラガミ……クアドリガでもいるのか?」

『そこまではまだわかりませんが至急アナグラに帰投してください。』

『

了解と返事をし、通信機をきった。

「連絡は終わりましたか?」

既にコアの剥離を済ませたアリサが聞いてきた。側には紅葉が回りを少し警戒している。

「ああ。あと近くに大型アラガミの反応があるみたいだからすぐに帰ってこいとき。」

「あの…それってあれじゃ…」

回りを警戒していた紅葉が指差した先にはヴァジュラがいた。生まれてすぐなのか体が少し小さく見える。

「まためんどくさいやつがきたな…幸いあいつは俺達には気づいてないみたいだから今の内に帰投するぞ。」

「は、はい。ほら、アリサも帰るよ。」

「……わかりました。」

アリサが少し不安そうな顔をしてたが紅葉がフォローしてたみたいだし。大丈夫だろう

第20話 戦闘訓練その2

「こんどはグボロ・グボロとコンゴウの討伐に行きましょう！はやく準備してください！」

先ほどの戦闘訓練から帰るやいなや早速次の訓練をしようと言ってきた。ミッション報告してからなと言い、その場を後にする。

「お疲れ様です。」

報告をしにヒバリに話しかける。相変わらず気遣いができる人だ、タツミが大好きなのも分かる気がする。

「シウウは問題なく討伐完了した。あと大型アラガミの件だけど、ヴァジュラがただけで他には特にはいなかったよ。」

「そう……ですか。」

「ああ、あとアリサがすぐ戦闘訓練に行くって言ってたからミッション受注するよ。」

「あ、それならもう完了してます。無理はなさらないでくださいね」

「おう。サンキューな」

装備を整え、ミッションに出発する。今回はコウタとカレルと一緒にミッションをする。紅葉は他に用事があったみたいで同行していない。

嘆きの平原

「さて、今回は標的が複数いる上に同時討伐になるのでチームを2つに分けようと思う。」

「4人で片方を一気に叩いて一対一にもちこんだいいんじゃないのか？」

「それも考えたが戦闘中の騒音とかで片方に気づかれて合流されたら厄介だから安全確実なほうを選ぶほうが得策だと思ったんだ。」

「ふうん……まあいい。それでどう分けるんだ？」

「実はもう決めてたりするんだ。俺とカレル、アリサとコウタにしようと思う。」

「マジで!？」

コウタが驚きながら言ってきた。コウタからしたら前にアリサと話した時の落ち度があるからあまり一緒にいたくないのが心情だったりするんだろうな。

「アリサは出来るだけ剣形態で行動してくれ。遠距離神機との行動の仕方を覚えてくれ。」

「わかりました。」

嘆きの平原 翔、カレル組

「翔、新型の方は復帰したのか？」

「アリサのことか？あいつならもう大丈夫だ、多分性格も前よりは優しくなってると思うぞ。」

「まああの性格のままだったらすぐに喰われちまうだろうからな。つか性格が変わるほどの事が起きたのかよ。」

「まあ半分は勘だけだな。……っと、お客さんか。」

嘆きの平原 アリサ コウタ組

「なあ……」

「……」

「なあ……アリサ？」

「……」

「アリサってば！」

「何ですか」

「その……ごめん」

「？、何であなたが謝るんですか？」

「いや、前に話した時にさ……俺、アリサを傷付けちゃったかなって……」

「……はあ、そんなことで謝ってきたんですか。」

「そんなことって…！」

「大丈夫ですよ。私は独りじゃありませんから」

「そ、そうか。それならよかった。」

「それより、後方支援頼みますよ。」

「おう、任せとけ！」

嘆きの平原 翔、カレル組

「おい翔、こっちに雷石が山ほどあるぞー。」

先ほど現れたグボログボロを討伐し終え、アリサとコウタの方に向かう途中なのだが…

「お、あつちにはガラス繊維が…」

カレルが回収素材を見つけては回収しにいくのでなかなかたどり着けない状態だ。

「グワウ！」

声のした方を見るとコンゴウが回転しながら体当たりをこちらに向

かつてしている姿が目に入った。避けきれそうにないので足に力を込め、装甲を開きガードを展開すると

「逃がしません!!」

銃声が響くと同時にコンゴウは突然動きが鈍くなり、目の前で力尽きた。

「あ、2人とも。グボログボロは終わったの?」

コンゴウの後ろからコウタが顔を出して言う。

「ちょっと前にな。アリサはどこに?」

「あいつならそこでコアの回収をしてるぞ。」

神機を捕喰形態にし、コンゴウの胴体をバクバクと音を立てながらコアを回収しているアリサがいた。流石にコアの捕喰方法くらいは知ってるか。

「あ、お疲れ様です。」

「おう。なんか変わった事とかはなかったか?」

「特にはなかったかなー」

「そうですね。問題なく討伐完了しました」

「そうか。んじゃ、アナグラに戻るか」

アナグラ

「今日はありがとうございました。また明日もよろしく願いします！」

ミッションが終わりエントランスで同じくミッションが終わったシユンとジーナと一緒にくつろいでいるとアリサがやってきてお礼をいつてきた。

「お前、確かりンド」

「はいはい、少し黙っときましょうね。」

何か言いかけたシユンをジーナがたしなめた。ジーナがいてくれて助かったな。

「もう戦場に立つても大丈夫そうだな。」

「はい。まだまだ経験も何もかも浅いですが皆さんの信頼を取り戻す為に頑張ります！」

「だってさ、シユン。うかうかしていると追い越されちゃうわよ？」

「うるせ、言われなくてもわかってるっての。」

「それじゃあ私は部屋に戻りますね。」

「おう。」

アリスを見送り、しばらくは3人で話していたが俺とシュンが飯に行くと言ったのでジーナも一緒に飯を食べることになった。そつえばこの2人と話するのははじめてかもしれない。

食堂

「俺ハンバーグ！」

「ジーナは？」

「私はカレーにするわ。あなたは？」

「どうしよっかな……ここはオムライスにしよう。」

言ったそばからシュンが笑いだしたので真っ先にハンバーグと叫ぶよりはマシだと言い返してやったさ。

「おまちどうさま！！今日はいいのが手にはいったからいつもより美味しいよー！」

食堂のおばちゃんからご飯を受け取り席に座る。こうしてみるとシュンにハンバーグはよく似合ってるのだがジーナがカレーを食べてるのは少し意外な気がする。

「今私がカレーを食べてるのが意外って思ったでしょ。」

「なんでバレた。」

「顔に出てたわよ。」

何の話？とシュンが口いっぱいにご飯を食べながら聞いてきた。とりあえず口の中の物を無くしてから喋ってくれ。

食べ終わり、2人と別れ、自室に戻る。今日はなんか疲れた…

「もう寝るかな、多分明日もアリサがつるさいだろうし。」

服を着替え、部屋の電気を消して寝た。

第21話 冬の夜明け

「翔さん、ちょっといいですか？」

「ん？」

「今まで私の訓練に付き合ってくださりありがとうございました。もしよろしければこの装甲を使ってください、」

そっついアリサはアリサが使っている装甲によく似た青い装甲を渡してきた。

「これは…？」

「“ティアストーン”です。これは私が使っている装甲と対になるように作られた装備です」

「長い間使ってたんですがある日急に壊れてしまっ……」

「ふうん。分かった、また使ってみるよ。」

「ありがとうございます！」

なんてことを言ってしまったのだがバックラーは専門外なんだよな……とりあえず使ってみるか。

「ヒバリ」今日のミッションはなんかある？」

「今日は贖罪の街でヴァジュラが現れたんですが…人数を割くのが難しいので翔さんとサクヤさん。それにコウタさんの3人でミッションをお願いします」

「わかった。そんじゃ準備してくるわ」

リツカに装甲の付け替えを頼み、アイテムの整理をする。いつもは4人だけど今回は3人だから少し激しい戦いになりそうだから少し多めに持っていくか。

エントランス

「今回のミッションの概要はこれくらいだ。何か質問はあるか？」

「あ、はいはい。」

「なんだ、コウタ？」

「えっと…アリサを今回の任務に出させて欲しいな…って。ほら、今回3人しかいないし、それに最近アリサ凄く頑張ってるみたいだし…」

ツバキさんの横で聞いていたアリサが目点を点にして聞いていた。

「ふむ…しかし今回のターゲットは“あれ”と同型の個体だぞ。…大丈夫か？」

「……いきます。いえ、行かせてください!」

「…そうか。よしわかった、ではアリサを加えてのミッションとする。気を抜くなよ!」

「「「はい!」「」「」

贖罪の街

「今回はヴァジュラの他にマグマ適応型コクーンメイデンと同型のザイゴートもいるみたいなので、雑魚といえど油断しないように。」

「でも今回は4人で行動するから大丈夫じゃない?」

「そうじゃなくて、ザイゴートは他のアラガミを呼び寄せる性質があるだろ? 雑魚に気をとられて気がついたら後ろにヴァジュラがいました。なんて事にはなるなってこと」

「なるほど!」

「気づかなかったんですか?」

「まああいつは動作の音とか声がかいかから近くにきたら気づくだろうが…まあ念のためだ」

「了解っす!」

「話も纏まったみたいだし、そろそろ行きましようか。」

贖罪の街 エリア〇

「お、いたいた。」

先頭を歩いていたコウタが忍び声で言う。指をさした先にはザイゴートと共にガラス片と瓦礫を食べていたヴァジュラがいた

「こんな時にあれなんだけど改めてアラガミの食事を見るとやっぱり生き物なんだと思っちゃうわね」

サクヤさん目の前に人類の天敵がいるのにそんな呑気な…

「あー、俺とアリサがヴァジュラを引き付けるから2人はザイゴートを攻撃してくれ。アリサ、いけるか？」

「はい！もう前までの私じゃありません！」

「…そうか。よし、それじゃいくぞ！！」

床を力強く蹴り、その勢いと体重を乗せた一撃をヴァジュラの体にくらわせる。不意討ちに戸惑ったのか一瞬ヴァジュラの体が硬直したがすぐに臨戦態勢に入った。

まあその時には既にコンボ捕喰をして距離をとってたけどな

アリサは少し、というか結構慎重気味に攻撃していたがロングブレードの特性を生かした中距離からの移動斬りでヴァジュラを翻弄し

ていた。たまにコンボ捕喰の時に入手したアラガミバレットをサクヤさんやコウタたちに渡したりもしてた

「ザイゴートは全部倒したぞ！」

アリサが渡してたアラガミバレットの効果もあつたのか予想より少し早く雑魚が片付いた。これで今は1対1だ

「一気に決めるぞ！」

怒りで活性化した所にスタングレネードを使い一定時間行動不能にする。そして顔面に向かってチャージクラッシュをくらわし、アリサからのリンクバーストLv3のアラガミバレットを放つ。この連撃とアリサ、サクヤさん、コウタが一斉射撃をヴァジュラに浴びせたが高台を飛び越えて別のエリアに逃げてしまった

「逃がしちゃ駄目だ。追うよ！」

「1つに固まってる狙われるわ！一旦別れましょう。…みんな、慎重にね」

「了解！」

贖罪の街 アリサ視点

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……ふう。」

壁にもたれかかり、休みながら息を整える。逃げてしまったヴァジュラを探しているのだがなかなか見つからない

「早くみつけない……と……」

振り向いた先にある大型アラガミが丁度入れるくらいの大きさの穴が空いたビルにヴァジュラがいた、間違いない。仕留めそこなったヴァジュラだ

周りを見渡しても私以外のメンバーはいない。幸い相手はまだ気づいてないので不意打ちをくらう心配はない。

「（でも、私1人でヴァジュラを倒しきれの……？）」

まだ完全には拭いきれていないトラウマと不安がつる。

「……よし、決めた!!」

意を決して隠れていた場所から出て、ヴァジュラに銃口を向ける。引き金を引くために指をそえるのだが指が震えてなかなか引き金にたどり着かない

ヴァジュラは私に気づいた見たいでにらみつけてくる

「あ、アリサー。ヴァジュラはいたか？」

私に話しかけてきた人がいる、翔さんだ。ヴァジユラに背を向けてこちらに向かって走ってくる

それをヴァジユラが見逃すはずもなく高台から飛び降りながら襲いかかるうとしている。翔さんはまだ気づいていない

「（このままじゃ……翔さんが……！）」

ようやく引き金にたどり着いた指に力を込めて引き金を引く

「よけてえええー——！！！」

放たれた弾丸がヴァジユラの頭に直撃し、爆発する。唸り声をあげながらヴァジユラは倒れた

翔さんは着弾する瞬間に避けてくれたみたいで当たることにはなかった。

「ハアッハアッハア……」

つよい動悸がする。息が荒い。早く落ち着こうとすればするほど動悸が強くなっていく気がする

「アリサ」

うつむいた顔をあげるとサクヤさんがすぐそばにいた。何か言おうと思いを巡らせるが何も出てこない

「わたし…わたし……！」

「頑張ったわね」

頑張った。ただそれだけの言葉に安心してしまった私は声を上げて泣いた。そんな私をサクヤさんはなんにも言わず私を抱きしめる。その行為を引き金に私はさらに泣いていた

「……うん……」

「あ、起きた。」

「……は……」

そっだ、私。確かヴァジュラに向かって銃を……

「頑張ったな。アリサ」

「ツバキさん!？」

「話しはサクヤたちから聞いた。……よくやったな」

「いえ……私1人の力ではあのトラウマをのりこえることは出来なかったですし……」

「それでも頑張ったのはアリサでしょ? ならもつと胸をはりなっ」

「そう……ですかね。ありがとう、コウタ」

「おお…アリサの口からありがとっていつ言葉がくるとは」

「どついう意味ですか！あ、そういえば翔さんは？」

「翔ならサカキの部屋に行ったぞ。なにやら話があるらしい」

「話？」

「詳しくは教えてくれなかった。まあ戻ってきた時に聞いたささ」

ツバキさんにもあまり教えてない話ってなんなんでしょうか……帰ってきたら私も聞いてみましょう

第22話 原因解明（前書き）

（注）この話は加筆修正する可能性があります

第22話 原因説明

「きたね。それじゃ、早速話を始めようじゃないか」

「その前に部屋の掃除をするべきだろ」

サカキ博士に呼ばれてきたのだが早速博士に対してツツコミをいれる。前からあまり片付いているとはいえない部屋（といってもサカキ博士が居座っているところが大半だが）だったんだが……なんか今は床全体が散らかってる気がする

「いやー少し研究に熱中してたらこうなってね。」

「はあ……」

この人は部屋を片付けてもまたまたすぐに散らかすタイプか……なんかもうめんどくさくなってきたからほうっておこう

「で、話というのはだ。あれから君からの報告を元に神殺しについて調べてみたんだ」

「それで？」

「まず神殺しが起きる理由だが……アラガミに対して何かとてつもない憎しみが君の脳にインプットされてる。それが原因だ」

「それはサラを殺された時に…」

「おそらくね。で、神殺しが発動する条件は自分、または大切な人が危険にあった時に発動するみたいだ」

「紅い目と瘢痕の理由は？」

「紅い目はまだわからないけど瘢痕の方は多分火傷のあとが何らかの理由で浮き出てきたと思われる」

「まあ小さい時に母親が料理を作ってる時に近くにいて火傷したことはありますけど…」

「ふむ、各部隊の部隊長とツバキには私から言っておくよ。引き続き研究も続けるから何かあったらまた連絡するよ」

「はい。では俺は失礼します」

サカキ博士の部屋を出てふうっと、息を吐く。神殺しの原因はやっぱりあれが原因か…

近くにある自販機で飲み物を買い、頭を押さえながらそばにあった椅子に座る。今日のミッションは終わったので何か非常事態がない限りは出撃しなくてもいいから少しゆっくりしていこう

「これを自在に制御できるようになればいいんだけどな……」

実際に発動したと思われるのは贖罪の街でソーマ、コウタ、サクヤ

さんと一緒にコンゴウの討伐に行ったときくらいだけど発動した時の記憶がないからな……今はどうしようもないか

空き缶をゴミ箱に入れてアリサがいる部屋に向かう。起きてればいいんだが……

「あ、翔。話は終わったの？」

医務室のドアを開けるとアリサとサクヤさんと一緒にミカンを食べているコウタがいた

「おう。アリサは大丈夫なのか？」

「私なら大丈夫ですよ。というかサカキ博士と何を話してたんですか？」

「神ご……じゃなかった。前にアリサと記憶がリンクしたことあっただろ？あれの話をしてたんだよ」

適当に思い付いた話を話す。またあとで聞いておくか……どういう物だったとか聞かれたら面倒だし

「記憶がリンクすることなんてあるの？」

コウタが2つ目のミカンの皮を剥きながら聞く

「私がまだ戦線に復帰できていなかったときにありましたね。それでどういうものだったんですか？」

フォローしてくれて安心したのもつかの間、さらに返答にくいやつを聞いてきた。どう返そうか…

「まだわからないそうだ。その内わかるようになるだろう」

ドアを開けながら入ってきたツバキさんがいう。助かった…

「翔、カノンがミッションを手伝って欲しいそうだ。行つてこい」

「了解です」

病室を出てエントランスに向かう

エントランス

エントランスにつき、カノンを探しているとヒバリの前でおろおろしているカノンを見つけた。ミッションの事を聞く

「実はかくかくしかじかで…」

話を一通り聞いたところ、アリサが頑張ってるのを見て自分も頑張ろうと思い、ミッションを受注したのはいいが、1人では無理そうなので俺に手伝って欲しいそうだ

あと紅葉とジーナもくるらしい

「準備できたかー？」

「オツケーです」

「よし、んじゃ行くか。」

翔たちがミッションに出発した頃、サクヤが自室で配給ビールについていたリンドウが残したディスクを調べていた

「やっぱりダメなのかね……」

調べてもやはりパスワードがなければこれ以上調べられないので肩を落とすサクヤ

そんななか部屋にノックの音が転がった。サクヤが誰と聞くとアリサの声が聞こえた。データベースの電源をきり、アリサを部屋に入れる

「もう体は大丈夫なの？」

「はい。おかげさまで……」

「よかった……やっぱり、アリサは強いわね」

「そんなことないですよ。皆さんのおかげです」

「コウタたちの前でもそういう風にしてくれたらいいんだけどね」

サクヤが冗談めかしている。それに対してアリサは少し頬を赤らめる

コーヒーを一口飲んだあと、サクヤは真剣な顔つきで話し始める

「アリサと一緒に赴任してきたオオグルマ先生の事だけど、言われて気づいた時にはもう別の支部に異動になっていたわ」

アリサが驚いた顔で聞く

「その後の足取りを調べてみても移動中にアラガミに襲われて戦死
って報告しかないのよ」

「そんな……！」

「残念だけど、やっぱり腑に落ちないのよね……」

2人の間に暫しの沈黙が続く。それを破ったのはアリサのほうだ

「サクヤさん、私にも何か手伝わせてくれませんか？」

「え？」

「何か1つでも、償うことが……でき……」

涙声でアリサが言う。それに対してありがとうと、お礼を言い、少し考えた後サクヤはディスクの事を話し始めた

「実はリンドウが置き手紙をしていたの。でもそれを見るにはリンドウの腕輪が必要みたいなの。……手伝わってくれる？」

「はい！」

「それにしても、死んだ後までこんなに振り回されるとは思わなかったけどね」

「ゴーレ・ニエ・モーレ、ブイピエシ・ダ・ドウナー」

「なに？」

「“悲しみは海にあらず、すっかり飲み干せる” ロシアの古いことわざです」

「そう。ありがとうアリサ」

そういつてサクヤは少し冷めたコーヒーをイッキ飲みする。それに続いてアリサもイッキ飲みする

「それじゃあ、私はこれで」

アリサは部屋を出ていった。サクヤは足音が聞こえなくなったのを確認し、再びディスクを調べ始めた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0051t/>

GOD EATER BURST【紅き目を持つ漆黒の捕喰者】

2012年1月9日22時46分発行